

Fate/～D C～ フェイト/～ダサシンクリード～

凡人9号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

別の世界の誰かの記憶を流し込まれた赤ん坊が抱いた「前世の俺が憧れたゲームの主人公のスキルを磨きたい」という一途な思い。

その思いのまま生き、そして何故か巻き込まれ、ノリの勢いに任せ世界を救った。

自由気儘な余生を過ごし、愛する女性の後を追う様に亡くなった男が目覚めるとそこに立っていたのは何やら見覚えのある男性。

呼び出されたのは90年代冬木の地！果たして彼はどんな戦場を見せるのか！

凡人9号、やらかす。

I・S〜DC〜インフィニット・ストラトス〜ダサシンクリード
〜既読推奨。つまりまさかの外伝。

前作じゃ出来なかった、いやさせなかった「アサシンさせてやろう」という親心から生まれた作品。

アサシン、出来るのかなあ？シリアス、苦手なんだよなあ・・・

目次

| | |
|-----------------------------|-----|
| 原作的じゃないその後、からの原作的英雄召喚らしいですよ | 1 |
| 原作的遠坂家族ですよ | 9 |
| 原作的英雄召喚までの間ですよ | 17 |
| 原作的遠坂母子御見送りですよ | 25 |
| 原作的遠坂庭茶番ですよ | 33 |
| 原作的衛宮さん家の戦争前ですよ | 41 |
| 原作的港戦ですよ | 49 |
| 原作的ホテル発破解体ですよ | 56 |
| 原作的愉悦セミナーですよ | 64 |
| 原作的森内戦闘ですよ | 72 |
| 原作的遠坂凜の冒険 | 80 |
| 原作的問答前日ですよ | 89 |
| 原作的問答直前ですよ | 97 |
| 原作的聖杯問答ですよ | 105 |

原作的じゃないその後、からの原作的英雄召喚らしいですよ

赤ん坊の時に別の世界で生きていた誰かの記憶が流れ込んで来たり、ゲームキャラに憧れて山走り回ったり、超技術の塊のパワードスーツが発明されたり、剣道場に通うことになったら師範がバグだったり、女にしか動かせないはずの超技術パワードスーツを動かせちゃったり、それ専門の学校に通うことになったり、別世界の誰かの記憶が流れ込んできた理由が判明したり、なんか色々あつて世界を救った鷺津翔です。千冬さんと結婚した鷺津翔です。

宇宙空母であちこち星に行ったり、星の地層調べたり、アサシン教団に呼び出されたり、月に人が住めるようにしたり、子供が生まれたり、進んだ技術で悪いことしてる奴等を叩きのめしたり、各国に招かれたり、技術開示して説明したはいいけどみんな理解してくれなかったり、その技術の一つを仕事の間で作ってそう言った技術専門の所に送ってドヤ顔したり説明した人たちに「これのマネしてみ」とメッセージを添えて送ってみたりと割と自由に生きていた。

孫が出来てしばらくし、「教科書に載っててびっくりしてネットで調べてみたらじーちゃんばーちゃんスゲー」と言いながらノートパソコン見せてきたので見てみたらもうほんとなんだこれ？全盛期のイチローとかルクセンブルクコピペみたいなことになってた。自分のやったことを客観的に見たらこうなるんのか、ってドン引きしてた。

いや、うん、だつてさ？

かつてISに乗り世界最強と名高く、生身でも全人類で五指に入らんばかりの女性、織斑千冬氏と嫁入り婿入りを賭けて半ば死闘染みたまモノであったと立会人であった篠ノ之柳韻氏は語る。

決着は織斑氏の首に刀を押ししている右わき腹から鳩尾辺りが血に染まった鷺津氏、そして鷺津氏から出る血を浴びる織斑氏が負けを認めたと話らしい。

これにて、織斑氏は名字を改め鷺津千冬と名乗ることになった。式は身内婚でひっそりとしたものであったが、交流の深い者達で盛大に行った模様。

結婚についてを織斑氏に「何故？」と世間の言葉を代弁して窺ってみた。すると彼女は「なに、お互い相手も居なさそうだったからな。その上、半端に知っている者よりも良く知っているからな、信頼出来る」と何食わぬ顔で答えた。

その身体能力について先の記事で理解してくれたと思うが、彼が有名である理由は二番目の男性IS操縦者であった事であり、そしてその技術力である。

IS学園時代の夏、一体どのようなツテがあつたのかは不明ではあるが、テレビ放送をジャックした篠ノ之東氏が電波に乗せ鷺津氏に直接コンタクトを取った事が明確に記録されている。

そしてその当日、単独での大気圏突破、大気圏突入と月への到達を残した三人（鷺津氏と篠ノ之東氏、そして助手とされるクロ工氏）は東無限工業^{T.U.I}を立ち上げ同年十一月と翌年三月まで活動を見せずに「宇宙空母の開発」に専念していたという考察が主だったものである。

中には「有澤を煽っていた」「第二代ISコアの開発」「特に何もしてなかったのでは？」と四つに分かれている。

鷺津氏が有名になるのは主に九月末に行われた「有澤決起」と呼称されることとなる「有澤重工を中心として数社が突如太平洋のド真ん中へと浮いて移動する」という事件であり、有名である。

その際にTUIとして、IS学園の生徒として一番槍を務め、有澤重工の所有する無人IS、ゴーレムの半数程を潰し、そのまま対IS用に開発され、今では重機としての活躍をしている「A I S CのI Sコアを五つ連結し、一つを予備エネルギー元とする機体を打倒し、左腕を失った。

一説には世界を救った、織斑千冬氏とイチャイチャしていた、など様々である。

その後失踪し、十一月に再びTUIとしてのテレビジャック放送に登場、「今年度のIS学園卒業生を受け入れたい。宇宙での仕事だか

らよく考えてほしい」といった旨の発言をし、卒業式当日まで再び失踪する。

次現れる時には宇宙空母を完成させ、IS学園卒業式にて織斑千冬氏と正式な交際を始めることとなった模様。

彼が頭角を現したのはこれ以後である。

TUI副技術長として第一に発明したのは惑星間ビデオ通話装置で空母の搭乗員の家庭に無償で提供。完全に自給自足が出来る様にプラント施設を空母に備え食材はすべて空母産にする。ソーラー発電で作られた電力をマイクロウエーブで射出し、再び電力戻す技術。さながら本物同様の義手、義足、義眼の普及。有澤と協力し「陸・海・空対応船」の雛形の設計、製作。

義手義足等に関しては全世界の技術者に招待状を送り、説明会を行うものの誰もが「自分じゃ無理だ」と心が折れる。その二週間後に「俺は作れたぞ、お前らはどうなんだ」と言わんばかりに学会に実物を提出、招待状を使い自分の元に集まった技術者達全員にも郵送するという奇行をする。

などと、とても常人とは思えぬ人物であるが、彼の上を行く篠ノ之東氏がいるおかげで彼が霞んで見えるという非常に何とも言えない立ち位置ではある。が、それでも世界に対する強大な影響力を有する個人として多くの人達から「早く老衰死しろ」と密かに言われているとか、いないとか。

全世界でそれぞれの言語版で発売される全世界の宇宙進出を纏めた新聞「インフィニット・ニュースペーパー」の一面に俺が新しい技術とかどつかと技術共有するたびにこんな文章がコピーされるんだ。なんだよ「世界に対する強大な影響力を有する個人」って。俺よか東さんのがすごいぞ。俺は半ば隠居してるし、千冬さんに孫がいる時代なのに今だ現役だぞあの人。

ってか俺死ねって思われてんのか。あれか？老害かなにかと勘違いしてんのか？言っとくけど俺って適当に技術開示して教えて孫たちと戯れてるだけだからね。あゝ孫達がかわいいんじゃないやゝゝ。

ただまあなんだ、近所の公園を武力と知性を駆使して占拠するのは止めなさい。みんなで仲良く楽しく遊びなさい。

孫達全員が成人を迎えると、千冬さんの体調が崩れ始めた。というか、一番上の孫に子供が生まれたからだろうか。

延命措置なんていくらでもできるし周りのいまだにブリュンヒルデ教やつてる連中がうるさいが、千冬さん自身が拒否しているという現状。

体調が崩れ僅か一月。何故か歴代の義手を抱えた孫達に囲まれて幸せそうに逝ってしまった。俺が知らないだけで孫達にはあらかじめ言って回っていたそうだ。

勿論葬式も身内葬。千冬さんとの付き合いのある人を全員集めて酒を飲みつつ思い出談議。

その最中に娘が預かっていた遺書公開。いや、だから俺知らないって・・・

大きく「お前もすぐに来い」の文字。千冬さん怖いって。

なんて言ってた翌週、俺にもガタが来たようだ。まさか千冬さんが呪いを使えるようになっていたとは思わなんだ・・・

少佐、いやもう少佐じゃないんだけど・・・曰く「仲の良い夫婦程後を追うように死ぬ、とはこの事だな」って言われて少し嬉しかったのは内緒だ。

そんなわけできつさかくたばる前に遺書を綴る。

不思議なことに息子達に孫達、だーれも反抗期らしい行動をしたことがないのだ。だから正直なんも心配はない。

故に、「好き生きて好きに死ぬ！俺がそれで楽しく生きれたんだ、お前らもきつと楽しい」その一文だけを書いて息子に渡して寝る。

前世の人の様な悲しい終わりではなく、ひ孫の鳴き声とそれをあやす孫の嫁の声と、息子の声を聴きながら死ぬという騒がしく、俺相応の終わりだったと自負している。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

不意に頭に声が響く。無機質な、熱を感じないような声。初対面の時のクロエの様な印象を受けるその声は、悩みを抱えていた。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

淡々と続けられる声は、まるで迷子が道も分からぬのに真っ直ぐ進んでいるように聞こえる。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」
突然溢れた輝きに目をつむり、着ている服が荒ぶる風に襲われるのを感じる。

数秒後、まるで輝きも風も元から無かったと言わんばかりに収まったのでゆっくりと目を開けていく。

その間に、リングに知識を入れられた時の様な感覚に襲われる。勿論あれよりも弱く、情報量も少ない。

そしてその情報から俺が口にすべき第一声は理解した。

「問おう。お前が俺のマス——ブフォツ！」

何故俺が呼び出されたのかは理解してない。

自分がなんのために呼ばれたのかは一応理解している。

しかし、目の前の事だけは理解できない。

だって言峰さん家の綺礼さんが真顔で突っ立ってるんですもの。Fateですか、もう記憶もおぼろげだから勘弁してほしいんだけどなあ……

「——私の顔に、何か？」

あー、うん。ジョージだわ、スツゴイジョージだわ。いやそんなことより対応してやろう、ほっとくのもかわいそうだ。

「いやなに、俺の知り合いにちよつと似てたんで驚いただけだ。で、お前が俺のマスター、でいいの？」

その後ろに赤いスーツ来た優雅さんと神父服のお爺さんがいるんだけど、まあ流石にこれで違ったらびっくりよ。

「ああ、そうだ。アサシン、でよかったかな」

「ま、そうなるな」

聖杯せいはいを名乗る情報提供者曰く「あなたは騎士騎士暗殺者魔術師セイバーライダーアサシンキャスターの四属性の中のアサシンです」と人狼チックな役職の通達が来た。

ライダーはISだから分かる。セイバーは、千冬さんと真正面から斬り合えるからなんだろうけど剣からビームとか・・・あ、零落白夜か・・・。キャスターはなんで。主人公の口癖位しか覚えてないけど大丈夫かな？

「まあいいか、考えるのは止めだ。俺の真名本名は鷲津翔、これまでのアサシンとは違っだろうが、まあよろしくだマスター」

「言峰ことみね、綺礼きれいだ。アサシンはすべてハサン・サツバーハではなかったのか」

「何事にもイレギュラーは付き物つて事さ。ま、これでも一応アサシン教団教祖の座を争った身だから何とも言えないがな」

ある日アサシン教団に呼び出され、行われたのはデズモンド君と俺のどちらを指導者にするかの会議だった。

結果としては俺とデズモンド君が全力ですべてうやむやにしてデズモンドパパにやってもらったことになった。

実はだ、うやむやにする前に誰かが言った「多数決でいいんじゃないやね？」の言葉に従ってほとんどの人間が手元の紙を破いて書き始めたのだ。まあそれ見て俺もデズモンド君も全力出したんだけども。

その結果として、票を書いた紙を集める箱をひっくり返してみたら俺の名前の方が多かったと言うことがあったのだ。

うん、絶対これだわ。襲名したわけじゃないんだけどなー。

「綺礼、彼はアサシンの平均的なステータスを超えている。十分期待できるだろう」

「失礼ですが、貴方は？」

「これは失礼した。私は遠坂時臣とむさかときわみ。綺礼の魔術師の師であり、そしてこの聖杯戦争に参加することとなるマスターだ」

赤いスーツを着た優雅さんが一礼して言葉を放ち、右手の甲についている紅い刺青呪を見せてくる。

俺はふと気になって自分の左手首を見てみるが、義手・・・ついで

に言えば、アサシン装束を赤い腰布で纏めているあのスタイルだった。

「少し服を捲つても？ちよつと確認したいことがあるんだ」

俺の突然の言葉に三人とも首を傾げながらも肯定してくれたので腰布を緩め、ジャージのジッパーを開けて黒いインナーを胸まで捲る・・・

結婚前に千冬さんに付けられた傷はある・・・そのついでに右袖もめくるが、結婚してから一年ほど後についた傷は無かった。

「大体二十四から五つて所か。俺の全盛期とは一体・・・」

体のノリというか、素振りのキレはドンドン上がっていったんだが、やっぱり肉体的ってのは大事なのか、技術は、覚えてるし・・・よし、孫と考案した技でもやってみようかな。

「綺礼。ひとまず、サーヴァントとの交流をしておきなさい。やつてもらふことは、追つて連絡する」

「はい時臣師。立ち合い、ありがとうございます」

「綺礼よ、私ももう寝るとする」

「はい父上。では、また明日」

そして出ていく二人の背を見送りながら、俺は思った。

「え？この部屋がマスターの部屋なん？」

なんとというか、仕事机と椅子一对とソファアが三つと真ん中に長机。

空いてるスペースに立つ俺と、足元の魔法陣的な何かを除けばまるで応接室そのものなんだけど、どうということなの？

「いや、ここは時臣師が私に貸してくださっている部屋だ。アサシンには、聖杯戦争が行われるまでこちらで慣れて貰おう、との話になっている」

ここって、後にギルガメッシュがワインとチエス盤で綺礼と遊ぶ場所だよな・・・あれ？原作知識が、お前かリンゴ！

「とりあえず、掃除から始めよう」

「そうだな」

な。まだ綺麗な綺麗と一緒に綺麗にした・・・駄目だ俺、疲れてるのか

原作的遠坂家族ですよ

どうも、素敵な老後を過ごして死んだと思ったらなんかFateにアサシンとして召喚されたらしいです。

綺礼君と床に撒かれた血を掃除して一息つこうとしたらグラスとワインが出てきてビックリ。

俺に愉悦れと?・・・流石にまだ早いだろ、今愉悦に目覚めたら俺の扱いが酷いことになってしまう。

というわけで無理に原作意識しないようにする。

「マスターは、神父なのか?」

「神は確かに信仰している」

・・・うん、俺の振りかたにも問題はあるんだろうけども話が弾まないな。

「で、魔術師でもあると?」

「聖堂教会から魔術教会へ転属となり、時臣師を師事している」

「魔術師ってイメージ的に科学大っ嫌いって感じなんだよね。で、俺はどっちかかっていうと科学者とか発明家とか言われる人間な訳なんだけど、機械は嫌いだったりする?」

「私は元々教会の人間、機械に対する嫌悪感は無いとも言える。だが、時臣師は良くも悪くも魔術師なのだ」

「つまり彼は機械は嫌いと。なら勝手に監視カメラとか設置するのは流石に駄目か・・・」

よし、孫の安全を追求したフロート式スタンガン装備のアレを使うか。スタンガンを取り除いてステルス機能を乗せればなんとかなるか?それは回数重ねて試すか、幸いまだサーヴァントは揃ってないようだし時間はあるか。

「科学者、と言っていたが・・・どんなものを?」

「あー、インターネットって言って通じる?」

「ええ、さほど普及はしていないと聞いてはいますが」

「まあ、相手がネット使ってたところからデータをパクれたり、もつといい物を作れたり出来る。あとは、カメラを空に飛ばしたりとかだ

な」

「それは、小型なのか？」

「そうだな、おまけに透明にもなれる。まあ今からしたらオーバーテックノロジーもいいところだろうけどな」

聖杯から渡された情報を見る限り、今の技術じゃ多分ステルスもフロートも再現できそうにないからな。良くてビツクドツクくらいだ。まあそれでも十年？十五年？くらい技術のオーバースルーが起るんだけれども……

「……とても、想像がつかないな」

「だろうな、だが、俺は科学で生き残るぞ。聖杯に望む願いもないが、古今東西の英雄に俺がどこまで通じるかわくわくしてきた」

「英雄、なのだろう？」

「人知れず人類を救っただけだよ。それも成り行きに流されてノリノリで」

「……少し、意味が分からないのだが」

「分からなくていい分からなくていい。分かれても俺が困るだけだし」

しかしワインが旨い！千冬さんが酒飲みだから付き合って飲んだりしてたが、あの人、自分で買ってくるのは発泡酒だけ。たまに貢物な感じでお酒が送られるんだが、あれがまた旨い。このワインと比べたら貢物の方が上物だが、日本酒とか焼酎とかウイスキーとかなので旨いワインはあまり飲んだことがなかったりする。

俺の知るワインなんてコンビニのワインとかバーにある高めの奴くらいだ。ちなみにバーのよりも旨い。

「時にマスターよ。この酒は趣味で集めているのか？」

「私の趣味と言えば……鍛錬だな」

「ほう、奇遇だなマスター。俺と同じじゃないか」

「ふむ、それでは明日。朝の鍛錬をともに行おうではないか」

「俺は主に剣道よりなんだが、マスターは何を努めているんだ？」

「八極拳、だな。ちなみに、私よりも父上の方が上でもある」

「ほう、あの人か。ちなみに名前はなんと?」

「璃正だ。私が敬愛する素晴らしい神父でもある」

「今度懺悔でもしてみようかな」

「・・・なにか、未練でも?」

「俺の嫁さんについて」

その言葉にピクリと反応し、飲もうとしていたグラスを机に置く綺礼。あれ?なんか地雷踏んだ?

「結婚していたのか」

「え?俺そんな風に見られてたの?」

「いや、アサシンとはそういうものかと」

「まあ俺はアサシン教団に所属してたわけじゃないしな。それに俺の時のトップも嫁さんもちだったぞ」

アサシン教団トップがデズモンド pappa からデズモンドに変わった時には結婚してたしな、彼。いやー幸せそうで安心した記憶が・・・あ、目頭が。

「つてかそんな禁欲的じゃなかったぞあそこ。え、なに?聖堂教会?つてそこはそんなだったのか?」

「いや、私が勝手にきつくしていただけだ」

「え?マスター、マゾなん」

「マゾ?・・・いや、普通のはずだ。これでも妻がいたこともあるからな」

「・・・まだ若いようなのに既婚者だったのか」

「もつとも、その妻も既に亡くなってしまい、彼女に関する記憶すら、曖昧になってしまっているのだがな・・・」

「俺にメンタルカウンセラーの真似事をしろつてか?」

「メンタル・・・なんと?」

「他人の精神を安定させる仕事だ。会話してその人のトラウマの解消の手助けしたりする人の事だ」

「なんとというか、そのような仕事があるのだな」

「懺悔専門の職業みたいな感じなのかな、懺悔がどんなもんなのか知らんけど」

「自身の悔いや悩み、罪と考える事を吐き出す場だ」

「やつべ、いっぱいある」

「それだけ罪深い英雄も珍しいであろうな」

「英雄って感覚欠片もないけどなー…さてマスター、明日の鍛錬のために眠るとしよう」

「ふむ、もうこんな時間だったのか。では、お休みだ。アサシン」

「マスターは人間だからな、ちゃんと寝るんだぞー」

俺？俺はあとちょっとボトルに残ってるワイン飲み切って、ついでにこの時代のネットを漁ってみよう。

この時代に来てやりたい事が一つだけあるんだ。

ゲーセン巡り。時代を超えた遠征って面白そうじゃね？

「八極拳、奥が深い・・・」

「私も長い事鍛錬しておりますが、今だ頂は遠いと常々感じております」

翌朝、教会敷地内で三人で並んで鍛錬。というか俺は主に二人がやってることを真似してただけ。

それでも分かる、八極拳・・・パネエぜ。とか思ってたらマスターがどっか行つたのを見計らって璃正さんが話しかけてきた。

「綺礼とは、どうでしょうか？」

「まあ、色々と難はありそうなマスターですが・・・俺は俺のやることをやるだけですよ」

「あの子はどうも、自身の置かれている環境を神からの試練、と捉えているようでして」

「やっぱりマゾだったじゃないか！」

「マゾ？」

「ああいえ、苦痛を快楽に変換できる特殊な神経構造を持った人間を指してマゾと呼ぶんですよ」

「ふむ、ならば綺礼はマゾではなく自傷癖の方が適切かと思いますが」

「俺はまだ知り合ってますから、父親の貴方が言うならそうなんですよ」

しかし、何とも言えないこの感覚。主にリンゴ、お前が寄越してくる情報のせいだよクショウ。というかリンゴが前世の人の記憶をサルベージしてる感じ……

今日も早朝に起きたら起きたでなんか知らん知識植えつけられてるし、もうマジ無理、朝練再開しよ……

「そこはもう少し深くですよ」

「……はい」

拝啓天国の千冬さん、師匠が一人増えました。

「時臣氏、とある場所からこの情報を引き出してきたので提出しておきます」

そういつて俺は空中ディスプレイを見ながら他のマスターの情報を手書きで写したものを纏めた物を差し出す。

「それは、確かな情報なのかね」

「疑うのは分かりますが、宝具を使って集めた物です」

「ふむ、拝見させていただこう」

俺から紙の束を受け取り、じつくりと眺めた彼は深刻そうに呟いた。

「これが、今の世界の技術だというのか」

「宝具って裏技使いましたが、それ専門の者なら同じことは出来るかと」

いや、ぶちやけ宝具リンゴは使ってない。

ちよつとパソコン持つてる家にお邪魔して衛宮切嗣えみやきりつぐのパソコンにお邪魔しただけだ。

仕事とは、いかに少ない労力で最大の成果を上げるかだ。バレなきや俺の手柄ぞよ。

勿論、衛宮さんの情報は他の所から引き出して流用させてもらった、ほんと悪いね！

「無理に受け入れる必要はありませんよ時臣氏、時代は流れ移るものですから」

「一応こちらでも確認を取ってみる。しかし、これは……」

ちよつと優雅じゃない時臣氏が見れた所で、俺は頭を一度下げてから退室する。

綺礼君曰く彼はこつてこつての古い魔術師らしいから外を知らんのだろう。まあ、俺は隠居してから技術が進まないのにイライラしてた人間だから多分彼とは合わないと思う。

と、部屋を出た所で誰か人と遭遇した。

丈の長いワンピースと肩にストールを乗せた、前髪パツツン毛先ゆるふわカールの女性。わっしー知ってるよ、綺礼君から教わったよ。

「どうも初めまして、言峰綺礼氏に呼び出されたサーヴァント、アサシンです。遠坂葵さん、でよろしかったでしょうか？」

「あら、これはご丁寧に。初めましてアサシンさん、遠坂葵です」

「時に葵さん。他のマスターの間桐雁夜氏と交友があると情報で知りましたが、人物像を窺っても？」

「え？ええ、構いませんが・・・雁夜君ですか」

「何か、事情が有るのです？」

「ええ、最後にあつた時に・・・多分、その時に聖杯戦争に参加する気になったのでしょうけど」

「ふむ。よろしければそのお話の内容を教えてくださいませんか？」

「・・・私の娘の一人を、彼の実家に養子に出したという話です」

「これは失礼な事を窺ってしまいました、すみません」

「いえ、魔術師の家ですし」

なんとというか、達観というか、静観というか・・・妙な感覚を感じる。俺なんて自分の娘が嫁に行くときにちよろつと暴れて千冬さんに叩きのめされたことは覚えている。千冬さん自身、俺が暴れてたから冷静になれた、と後に酒の場で語ってくれた。この人ブラコンってか凄いファミコンだったと、この時初めて知った。

嫁入りなんかよりも酷い状況なのにこんな冷静なんて、魔術師ってどういうことなの・・・

「遠坂の家は貴族ですので、こういったこともあるのかと、嫁に入る時に覚悟はしていましたので」

俺が生きた時代と多分世界も違うだろうから認識というか、常識は

違うのだろうか・・・少し異世界にでも飛ばされた様な気分に含まれた。多分この人の価値観が俺には受け入れられないってだけなんだろうけども・・・

この年にして初経験とは、いやはや、長生きってのはしてみるもんだね・・・死んでるんだけどさ。

「あなた何者!」

今、目の前にいる小さなツインテールの少女が俺に指をさして叫んでいる。まあ気持ちは分かるよ、自宅に他人がいるとか違和感というか恐怖だもんね。

ただこの子は知っていると、というか覚えてるよ。

「初めましてレディ。自分は言峰綺礼氏に呼び出されたサーヴァント、アサシンです」

ヒロイン、だったよね? ツンデレだったよね? 宝石使ってたような気が・・・

「そう、綺礼のサーヴァントだったのね。私は遠坂凜よ、覚えておきなさい!」

「では凜嬢と。ああ、この響きは実に君に似合ってるな」

「当然よ! お父様とお母様がつけてくださった名前よ!」

うん、腰に手を当てる胸を張る姿は可愛らしいものだな。

「いいことアサシン! 貴方のマスターの綺礼の師であるお父様をちゃんと守りなさい!」

「それは、どうだろうな。仮にも戦争を歌ってるんだし、おまけに俺よりも強い英雄が同盟状態の時臣氏を除けば五人もくるんだ、まず俺が生きれるかどうかの問題になってくるから気軽に返事は出来ないな」
思い出した、俺、息子にも孫にもこんな感じで返事して、その度に千冬さんに叩かれてたわ。

ああ、俺の返事のせいで凜嬢が泣きそうだ・・・よし、そうだな。

「凜嬢。君にこれを渡しておこう」

「これは・・・?」

俺がそつと取り出したのは首から下げられる紐のついたお守りだ。

孫達が心配なあまりに発信器を仕込んで渡したはいいものの、それに気付いた息子と娘に突き返されたものだ・・・防犯大事だよ？」

「遠坂はキリスト教徒だろうが、日本の神様はとつても寛大だね。それに祈っておけば、まあ日本の神様が何とかしてくれるはずだ」

「・・・英雄なのに神頼みなんて、ダサいわね」

「元々ただの人間だしなあ・・・嫁さんが子供産む時なんて神頼みしか出来なかったし」

「え！結婚してたの！」

「凜嬢は俺をどんな風に見てたの？ねえ、よかつたら教えてほしいなあ」

曰く「同級生の男の子」らしい。この数分で一体俺の何を理解したのか、解せぬ。

原作的英雄召喚までの間ですよ

どうも、なんか俺を聖杯戦争なんて言うカオスな戦争に呼び出したマスターと酒飲みながら話したり、その父親に師事を受けたり、マスターの師匠で従っているらしい別のマスターにネットから得たというあやふや感のある情報を渡し、その奥さんに他のマスターの事を聞いたり、その娘に発信器を仕込んだお守りを渡したりした英雄こと驚津翔です。俺、多分この世界の英雄ちやうんやけど・・・という思いを仕舞い込み、今日も元気にいきまっしょい！

「・・・ヤベエ、ヤベエよ・・・千円札両替出来ねえ」

そう、だって時代が違えば通貨が違う。

「しかし硬貨はいつだって同じ。そう、日本ならね」

※日本以外もです。

「ヒヤッハー！この時代のゲーセンは最高だぜーッ！なんでこれ殴らなきやいけねえんだよ！台パンがデフォとか半端ねえぜッ！」

俺、前世の人も俺自身もこの時代生まれてないからなあ・・・俺の生まれる前のこの時代の情報漁ってから夢に見ていたが、まさか叶う日が来るなんて思ってもみなかった。

というか、ゲームはどこの世界も同じような発展してんのな。なんというか、なんだろうな、実に興味深い。前世も隠居してから「何故どこの神話も似たような話があるのか」と頭を悩ましてたからな。結局答えは出なかったけどもここにきて俺は理解した。

人間ってそんなもんなんだ。

「しかし、普通に脱衣麻雀置いてあるってどういうことなの？」

そんなことを思いながら、綺礼か璃正さんにお金借りようと真昼間のゲーセンを後にした。だって小銭使い切っちゃったし、札は世代がちげーし仕方ないじゃん。

「まあそんなわけですよ璃正さん、俺はすっかり失念していた・・・せめて宝石とかなら換金出来たのに」

「・・・英雄と言うのも、案外俗っぽいものなのですね」

「英雄って言っても人間ですしね。それに俺、興味本位で動くような人間の最たる例の科学者ですし。それに、ちよつと魔力とか魔術についての勉強もさせてもらってますしね」

「アサシン殿、魔術師と言うのは——」

「分かってますって璃正さん。魔力回路がなくなつちや無理なんでしょう？でも実際魔力って何さ？って疑問に思いましたね、魔力を生み出す機械でも作れたらなーって研究してまして」

「それが出来たらキャスターとして呼び出されてもおかしくないのですがね」

「あ、自分キャスターの適正あるっぽいです。まあ魔力は使えないんですけど、それってつまり、俺の技術力が魔術並って認識でいいんですかね」

「失礼ですが、本当にアサシンなので？」

「アサシンのつもりが一番無いんですけどねえ」

召喚された直後も色々悩んだが、しいて言うなら、セイバーはギリギリある。

IS全盛期時代の技術流用して誰かさんのクローンを作ってるクソつたれな連中を千冬さんと一緒に刀一本でぶっ潰しに向かったり、なんか有名な剣術家の人と妊娠してる千冬さんの代わりに立会いさせられたりといういろいろ大変だった。

ちなみに俺の全盛期は競技用ISに乗った教習生を生身で落とせるレベル。千冬さんなら生身で国家代表候補は落とせるんだからやっぱり次元が違ったでござる・・・力をつけた分だけその差が分かっちゃうんだからなんだかなあ、って感じだった。

ライダーは言わずもがな、キャスターは科学者発明者としての行動でいいんだろう。アサシンもアレだが、ぶっちゃけそれだけだったしなあ俺・・・

「まあアサシンとしての仕事はしつかりやりますよ。それも出来る宝具ですし、俺自身の技術力もハンパじゃないですよー？」

「・・・その、口調だけはなんとかならないのかね？」

「老年期の口調ではこの様な喋り方になるのじやが、いかがかな？」

「その外見で、そんな声と口調は・・・戻して貰っても?」「ですよー」

二十五歳の外見で爺さんボイスに口調とか誰得よ。ちなみに孫のリクエストに応えていたらいつの間にか孫達の前では素になってたパターンの奴だ。千冬さんには不評だったけど個人的には気に入っていたりもしていた。

「ところで璃正さん、マスターには嫁さんがいるって話だが」

「ああ、数年前に自殺してしまった。彼女の事で、綺礼は記憶を少しな」

「ショックで自己防衛による記憶喪失なのかねえ」

「詳しく伺っても?」

「人間つてのは強い恐怖とか、ショックを感じると脳が勝手に『そんなことは無かった』とか『これはこうだった』って記憶を挿げ替えるんですよ。例えば、子供が誘拐されそうになった時にその誘拐犯を脳が勝手にアニメや漫画のキャラクターにする、って具合で」

「ふむ、知り合いで記憶がずれている方がおりますが、そのようなことがあるのですか」

「医療の分野ってホント凄いですよ。学会とかで否定されてたのが少ししたら手の平返しのように容認されるってのは多いですからね」

埋もれた文献にあった技術をやってみたらあら不思議、これなんて埋もれてたん?ってくらい素晴らしい物が出来上がった。まあ当時の技術じゃ再現不可能なだけだったんだ、ってオチ。

ISなんてそんな技術の塊だったのに何をみんな驚くかねえ。いやまあ、コアはそれとして異常なだけだけでも・・・

今日も今日とてワイン片手にハッキングのお時間です。

今日のゲストは遠坂時臣さんです、どうぞ、よろしく願います。

「えー、本日使うのはこちら。未来のパソコン」

「・・・君は、未来の英雄だったのか」

「未来というか、多分時臣氏の専門分野の延長、みたいな?」

「その言い方ではまるで・・・まさか、平行世界ツ!」

「パラレルワールド、みたいなもんですかね」

「パラ？すまない、教えてくれないかい？」

「例えば、この世界で聖杯戦争に時臣氏が勝つとします。ですが、可能性としては負ける世界もありますよね？」

「ああ、その通りだ。勿論、私は勝つがね」

「ですよ。で、この世界が今後進む先が時臣氏が勝った世界だとすると、俺は負けた世界の人間」

「ふむ、まさに我が遠坂家が目指す第二魔法そのものだな」

「で、その負けた世界のさらに未来の人間、って感覚でオツケーです」
「ふむ、なるほど、つまり・・・今から君が使う技術は現段階ではこの世に存在し得ない、ということだね」

「相手にそれ相応の技術力と探求心があれば、届きうる、くらいの技術力で抑えてますけどね」

「・・・なぜそのような事を？」

「まったく謎の技術。これは時臣氏に分かりやすく言うと魔術と同じなんです。実際、凄腕のハッカーやクラッカーの事を魔術師と呼称ウィザードすることもあるのです」

「なるほど、理解した。配慮に感謝する」

「俺がやりたくてやってる事ですしね。それに、この技術力に気付き、誰かが手に入れた時、ソレは新たな平行世界へと繋がりますしね」

「実に興味深い内容だ」

「非常に残念なことに、平行世界を観測できる技術がないので第三者からしたら『無意味なことやってんなー』って思われるくらいですけどねー」

「しかし、そういう視点からの第二魔法への接触の発想には至らなかった。そうだな、自分が広げた平行世界への干渉は強まるかもしれない、これは要検証すべきだな」

「なんか時臣氏が楽しそうで怖い。というか、技術の説明してたら平行世界云々言ってたでござる。ごめんトツキー、俺自身この説明意味不明なんだけど大丈夫だったのかな・・・」

「そんなわけで、これから俺の仕事を見せようと思います」

「いったーねっと、だったかね。魔力の代わりに電気で進化を追求した結果」

「魔力の代わりって一番初めは人力からのスタートでしたけどねー」
とりあえず空中モニターを出して誰でも見れる無差別可視モードに変更。

「では今日は、聖杯戦争参加メンバーの中で最も情報を仕入れているであろう人にちよっかいかけてみようと思います」

「それは、大丈夫なのかい？」

「ちよっかいかけるだけですし、仕返しにこつちをクラッキングやらハッキングしようとしても無駄無駄無駄ア！時代が違うんだよオ時代がアツ！この時代の技術なんざ、この俺様からしたらモンキーなんだよオツ！」

テンション上がったちゃったけど実際それくらい差があったりする。こちらら束さんと一緒にあちこちの研究機関見張って、金の流れが妙な所を見つけて、そこを更に調べてクソつたれな組織のデータを全部搔っ攫うのが生業だった俺に敵うとでも？

正直チートに思えるかもしれない。だがしかし、束さんのがもつとチートなんだ。あの人絶対おかしいよ、世界からイレギュラー認定されず天敵もないから好き勝手のさばってたし・・・

「はいこれで新しい情報ゲット、ありがとござーまーす」

「・・・随分早いものだな」

「あ、これが普通とか考えないでくださいね。俺、自分がおかしいって自覚くらいはあるんで」

「当然さ、英雄なのだからね」

「さーて情報を確認と行きますか・・・うむ、対策として偽情報を入れたりもしているが、暗号の様な物だろう。あとで解析して情報提供しますね」

「暗号は分かるのかい？」

「何事にも法則性という物はありますからね。ま、俺がぶっ飛んでるんで暗号なんてちよちよいのちよいですよ」

「分かった、期待して待つておくよ」

部屋から時臣氏が出ていくのを見送り、さつそく暗号解析に取り掛かる。この秘密を暴く時間が毎度毎度楽しいんだよね、リングゴ知識のおかげで楽しさ半減だけど。

そんなリングゴだが、別に悪いとこだけじゃない。むしろ良い面を俺が勝手に悪いと捉えているだけだ。

そんな良い面であり、悪い面でもあることの一つを教えよう。

「しかし、習得速度が速すぎるのではないのですかな・・・流石英雄、といったところなのでしょうか」

「いえいえ、まだ璃正さんにもマスターにも劣りますよ」

そう、どこをどうすれば更に良くなるか。がリングゴ知識で勝手に分かるのだ。

これに関しては今はありがたい。聖杯戦争は早ければサーヴァントが七体揃った三日後くらいに終わることもある。つまり、最短でそれだけの期間しか俺は璃正さんに八極拳を教われないのだ。

限られた時間の中で、最大限の事を学ぶにはもってこいの利点なのだ。

まあ、なんだ・・・じっくり時間をかけて習得したい事をすぐに習得してしまうのが悪い面でもある。

老後に盆栽を趣味にしてみたんだが、この盆栽の最も美しい姿、をリングゴに与えられたりして萎えたのは良くない思い出だ。

「・・・あ、なんか中国武術ってスキルが付きました。なんかまだＣらしいですけど」

「スキルは習得した証。ですが、まだまだ頂は高いですよ？」

「勿論ですとも。これからも、ご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします」

「私の持てる全てをお伝えいたしましょう」

俺の幸運って、いい師匠と巡り会えることに極振りされてない？ だってリングゴに目をつけられたり英雄として召喚されたりとか、どう考えても運ないだろこれ・・・

「アサシンよ、時に私の八極拳は・・・父上のソレと違い、人体の破壊に特化しているのだ」

「なんか暴露始まったけど、どうした？確かに今璃正さんいないけどどうしたん？」

「父上が全てを伝えると言ったのだ、私の全ても、同じく教えよう」

「まあ確かに、アサシンとしては人殺しの術を学んでおくのは悪いことではないからな。マスター、よろしく頼む」

「実戦で鍛えた私の拳、すべて糧とせよ、アサシン」

「・・・令呪とか、使つてないよね？」

「・・・使ったら、習得速度はさらに増すか」

「やめて！貴重な令呪をそんなことに使わないでツ！」

「なんとか令呪の使用は防いだが・・・しかし、八極拳スゲーわ。力の流れを支配とかどういう事なの？踏み込んだ力を全て活用して前に吹き飛ばすように動くって何さ・・・まあ使えるようになった俺もどうかと思うけども・・・」

「まあおかげで中国武術のスキルがBになったけどな・・・スキルってこんなポンポン上がる物だっけ？」

「あ、中国武術ヤベエ」

「どうしたアサシン」

「いや、これマックスがA++らしい」

「そして今は、B。だったな」

「どれだけ先が長いんだよこれ」

「つまり、まだまだ鍛錬が必要だということだな」

「・・・なんで嬉しそうな顔してるんですかねえこの人は」

「キモイなあ、このマスター。誰か変えてくれないかなあ。」

「そう言えばアサシンよ。時臣師がそろそろ英霊召喚をするつもりだそうだ」

「どんなの呼ぶつもりなんだ？」

「なんでも、最古の英雄だとか」

「サイコの英雄？なんかヤバそうだな・・・」

「ああ、実に強力なサーヴァントなのだろう」

「あんまり期待できそうにないけどなあ」

「・・・む？」

「・・・え？」

「最古の英雄、だぞ。アサシン」

「サイコの英雄、だろ？マスター」

その日は結局、噛み合わずに就寝の運びとなった。

原作的遠坂母子御見送りですよ

ゲーセンに行つてジェネレーションギャップを感じたり、璃正さんと頭を抱えたり、時臣氏が何故か歩み寄ってきてくれたり、中国武術のスキルが付いたり、ランクアップしたり、マスターとすれ違つたりと色々のんびりした日々を過ごしている鷺津翔です。

何やら時臣氏が我らを集めてなにか大事なことをするらしいので情報大量に抱えて集合場所へ向かった。

「・・・なんだこれ！すげえ！すげえ!!」

一声かけて部屋に入った俺を待っていたのは振動するブラックバーン振り子が紙に文字を書き写しているところだった。

「ほう、君にもこの素晴らしさが分かるかね、アサシン」

「ええそれはもう！これは残しておくべき技術、いや魔術ですよ」

原理がさっぱり分からないが、そこは魔力で補っているのだから・・・魔力つてスゲエ・・・

やっぱりダウジングとかは本当にあつた技術だったのか！

「いやあ、こここの所色々研究させてもらつてるけど俺が把握出来たのは地脈だけだったしなあ」

「科学で地脈の位置が分かるのかね？」

「技術力はぶっ飛んでる状態ですけど、何世紀か進めば調べられるようにはなるかと。まあ、その辺の発想力がある奴がいれば、ですけどねー」

青いツナギに帽子を目深に被つて片手に計測器もつて冬木の街を練り歩いてました。電流計測器みたいなので地脈の上にいる時に針が振れるようにしたんだけど、後で遠坂家にある地脈の地図と比較してみたら一致してた。

魔術師つてスゲエな、道具使わなくてこれかよ、と一人で戦慄していた。

結果として、地脈の力をほんの少し借りれるかどうか、の研究をしている所である。

魔術師なら簡単に借りれるんだろうが、まったく魔力のない一般人

の俺が地脈の力を借りれたらそれはすごいことになるぞ！

あ、なんか知らんけど中国武術のスキルがAになつてた。多分地脈とかが関係してるんだろうから璃正さんに聞いてみたら「これまでは自身の力しか知らなかったものが、より強大な利用できる力の存在を知ったからでしょう」とのこと。

つまり、地脈を利用するのが中国武術の神髄とな・・・ということだ。

「しかし、今だ魔力つてのがよく分からないな・・・魔力がないから、つて言われちゃったらそれまでなんだろうけども」

「しかし、今のアサシンの体は魔力で出来ているのだが」

「いきなりそんなもん渡されても困っちゃいますよ。使い方さっぱり分からないんですから」

「英雄とはそういうものなのか・・・」

「まあ自分、魔術衰退中の近代どころか衰退しきった未来ですから。いや、探せばいたのか？いてもおかしくない感じだったけど・・・悔しいなあ」

自分、現状で満足してました。どうせいないだろうって思ってた・・・歳とると価値観凝り固まっていやねえ。

「あ、これ最新の俺の情報です。お納めください」

「うむ、ありがとう」

「ところで、今の振子は？」

「ああ、ロンドンにいる間諜からの連絡だ。資料は照らし合わせて完全にしておきたいと思つてね」

「そうですね、俺の情報は細かいところまで分からないので専門家の視点とはまた違うでしょうから」

「うむ、情報は大切だ。有利に事を運びたいからね」

優雅さん優雅だけどなんかなー・・・ま、いいか。

「で、時臣氏。何やらヤバめの英雄を呼ぶと聞いたんですが？」

「うむ、我が家の縁を全力で使い仕入れたのが、この触媒だ」

そうドヤッ！ってしながら俺に見せてく来たのは、両手に乗せた石を見せてくる、石というか、なんというか・・・あ、これ化石か。博

物館で見たことあるよ。

「世界で最初に脱皮をした蛇の化石だ」

なんかで聞いた事ある様な謳い文句だな、なんだっけ、神話？

「時にアサシン、綺礼がこの家に入るところを誰かに見られてたりなどは？」

「大量のステルスフロート偵察機を配備して異常があれば報告するようになっている、大丈夫です」

ちなみに俺は今、遠坂家の使用人の人と同じものを作って貰い、ソレを着ている。申し訳程度のカモフラージュだが、しないよりはいいだろう。潜入するときによく着たことない服とかよく着てたけど、この服、スゲエこだわってる。一流の貴族とは使用人の着る服にさえ気を配るのだと知った。

「そうか、私にはよくわからないが万全なのだろう」

「それでもアサシンですからね、生きてた時よりそう言った感覚が研ぎ澄まされてるみたいなんです」

「クラス適正のおかげなのだろう、そのまま頼むぞ」

「御意。して、英雄召喚は何時行うので」

「今夜だ。ではアサシンよ、これからはマスター同士の会話となる」

「分かりました。お話では、奥方様とご息女様が今日経つとの話なので、そちらにご挨拶に向かいます」

「ああ、凜はまだ幼い上に活発でもあるから、よろしく頼む」

「ええ、孫娘を思い出してちよつと頑張りすぎちゃいましたよ」

「その顔で孫と言われると違和感が・・・それに、一体何をしたのだ」「護身用の道具を、うん、少しですよ、この世界で作ったのでそれほど異常ではないと思います・・・よ?」

「・・・ありがとう、と言っておくが、魔術と行き過ぎた科学は等価値なのだろう。今後はあまりそう言ったことは無いように」

「はい、すみませんでした」

「うむ、では下がってくれたまえ」

「では失礼しますねー」

何作ったかって? 魔力でシールドエネルギー作り出すブローチ。

私服？制服？のりボンの結び目に付けられそうだったのでちよつと作ってみた。

今の技術でも作れるんだぜ？まあ魔力云々に関してはマスターに「ちよつと魔力を利用したいんだけど、どうすれば出来るようになるかな」と相談したら快く手伝ってくれた。あのマスター絶対気付いてないって、スツゴイ笑顔だったことに気付いてないって・・・

とりあえず、廊下であつた葵さんに「どうも奥方様、お手伝いしましょうか？」って聞いたら「私の方は大丈夫だから、凜の方に行つてもらえるかしら？」と左遷された鷺津翔です。

んで、彼女の部屋に前まで行くと部屋の中から何かが倒れた音が・・・

ということなので「話は聞かせてもらつた！」とドアを開けて中に入ると彼女の体の三分の二くらいある大きなスーツケースに押しつぶされていた。

咄嗟に駆け寄りスーツケースを退かして彼女の上半身を起こして座らせる。

「あーあーもう服が汚れちゃつたな」

「ええ、着替えるわ」

「それと、もう少し小さいケースにしようか」

「・・・そうね」

「着替えるんだから俺は部屋から出て外で待つてるから、何かあれば呼ぶんだよっ」

「はい」

なんか、娘の相手をしている感覚だ。ああ、そういえばあの娘も活発でよく怪我をしてはしょんぼりしてたっけなあ。いやあ、懐かしい。

と数分間、昔を思い出しつつ壁に背を預けて待つっているとドアが開けられ、

「あ、アサシン。これ持ってもらつてもいいかしら？」

「ええ、仰せのままに」

彼女の体半分ほどのスーツケースを重そうに引きずって出てきた。うん、実に可愛らしい。

二階へ上がる階段の上にマスターがいるのを見かけてつい話しかけてみた。

「マスター、話は終わったのか？」

「ああ、注意すべきマスターについて教えていただいた」

「衛宮つて人の事か。手段選ばない奴はやること酷いからな・・・」

完全にブーメラン発言だけだこれ、束さんと一緒に「何が一番有効か？相手が嫌がることさ！」を地でやってたからな。いや、若さつて怖いね。

「時にアサシン、その荷物は？」

「今日から私とお母様が禅城ぜんじょうのお家でお世話になりますから」

「あれ？ここからそこまで結構距離なかったっけ？」

「大丈夫よアサシン、電車で通うから」

あくまで普通を装ってるつもりなのだろうが、頼ってもらえない子供心が感じられる。でもね、戦争なんだ。特に衛宮さん家の切嗣君なんて洒落じゃないくらいの奴なんだ、ごめんね。

「綺礼、アサシン。あなた達はお父様のそばに立って戦うんですよね」

「無論。そのために私は弟子として招かれたのだから」

「そのために、俺はマスターに召喚されたわけだからね」

「では綺礼、貴方を信じていいですか。最後までお父様を守り通すと、約束してくれますか？」

「それは無理な相談であろう、そんな口約束が容易く出来るような安易な儀式であれば、君や奥方様を避難させるようなことは無かったであろうからな・・・時にアサシンには問わないのかね」

「アサシンはもう信じていますので。それに、私はやっぱりあなたのことを好きにはなれないと思いますし」

「ま、ウチのマスター胡散臭いしな。何考えてるか分からない面してるから子供からしたら天敵なんだろうな」

「その代わり、アサシンはまるで子供なので安心できます」

「やめてね？俺だっていい大人経験した人間だからね？一つの時代作った一人だからね！」

「ほら、その反応で信用できません。綺礼はこういったやり取りをしても反応しないので」

「だそうだマスター、なにか反論は？」

「ふむ、そうだな・・・凜、そういうのは本人の前で口にしてはいけない。でなければ、君を教育している父親の品格が疑われるからね」

「・・・ええアサシン、私、綺礼のこういった所が嫌いです」

「俺は結構好きだけどなー、こういう所」

「・・・アサシンは物好きよね」

「なんて失礼な娘っ子だ」

つい、本当につい、彼女の頭に手を乗せて頭を揺さぶってしまった。娘が剣道大会で優勝したので祝ってやったドヤ顔で「あと少しで父さんにも勝てるよ！」とか言って来た時と同じことをしてしまった。そういうえば、孫娘にも同じようなことしたような・・・なんでだっけ？「あらあら、仲がいいわね、凜」

「おっ、お母様！」

「いやーやっぱりいいものですね、つい娘を思い出してしまいました。すみません」

「いえそんな事は。機会があれば娘さんのお話もぜひ聞きたかったのですが」

「今回ちよつと洒落にならないみたいなので、なあマスター」

「そうだなアサシン。時に、私は少し奥様と話がある、先に彼女を車へ案内して差し上げろ」

「了解。では行こうか凜嬢」

あ、先に走って行っちゃった・・・頭揺すった事に怒ってるんだろうけども、なんかショックだわ。

「本来なら送っていきたいんだけど・・・俺って冬木から出れないし」
「私は、繋がりあると思われると動きづらくなりますから」

車に乗った葵さんと凜嬢。本音を言うと、車にカーナビとかつけてあげたかったけど・・・どうも葵さんは機械音痴な模様。というか、遠

坂の姓を名乗ると機械音痴になる病気にでもかかるのか？ つてレベルで遠坂家ヤバイ。

使えないわけじゃないけどボタン押し間違えて焦る、とかだけでも。

「そのお気持ちだけで十分ですわ。言峰さん、アサシンさん。どうか、主人の事をよろしくお願いします。あの人の悲願を、手伝ってあげてください」

「最善を尽くします、ご安心ください」

「全力で他の連中ぶっ潰しますので帰ってくる準備しておいてくださいねー」

葵さんのひきつった顔が印象に強く残った。

ついでにマスターに舌を出して嫌いアピールしてる凜嬢にほっこりした。

「いやー、しかし衛宮切嗣はスゲエな。まるでゴルゴだ」

時臣氏以外の遠坂家は現在時臣氏の「聖杯戦争に巻き込むわけにはいかない」という方針によって誰もいなくなり、今俺は今までマスターが集めた衛宮切嗣の情報を漁っている。

「ゴルゴ？」

「漫画の主人公なんだけどね。凄腕の殺し屋で、大体どんな依頼でもこなすためには金に糸目付けないんだよ。一人殺すためにマンション買ったりとか」

「それは、なんとというか、凄まじいな」

「リアルにゴルゴがいたらこんななるのか、でも面白いなこいつ」

「面白いとは」

「こんなストイックな男の望みってのはなんだろうな」

「・・・時にアサシン。お前は時臣師についてどう考えている」

「どう、とは？」

「私は落胆しているのだ。ああ、いつも通りだ、と」

「いつも通りとは？」

「私の空いている穴を埋めるに足る人物ではない、ということだ」

・・・ああ、そういう愉快の前は悩める人だったか。

「マスター、君は一つ勘違いしている。誰かに与えて貰うモノなど本当に価値のあるものかね？」

「・・・それは、どういう事だ」

「真に価値のあるものは自分自身で気付くモノの事だ」

だつてさ、リングにはほぼ全て自動的に知識植えつけられるんだぜ？
こんなのに価値なんざねえよ。まあ利用はするけど思い入れなんて欠片もない。きつとマスターも同じようなものだろう。原因がわからないから余計にだわな。

「とりあえず、マスターは失った奥さんの記憶を思い出す必要がある。きつとそこに鍵があるはずだ」

「・・・そう、なのか？」

「・・・治療でもしてやろうか？」

「いや、いい。思い出す努力をしてみよう。誰かに与えて貰うモノに価値など無いのだろうか？」

「んじや、頑張ってみてくれたまえ。何かあれば相談に乗るから気軽に聞いてくれ」

「ああ。だが、その前に今は聖杯戦争だ」

また資料に向かい直したマスターを見ながら・・・どうしよう、リングにサルベージされた前世の人の記憶的には普通に進めば璃正さん殺されるんだっけ？個人的には死んで欲しくないなあ。とか思ってた。

あ、ランサーのマスター殺しておこうかな？

原作的遠坂庭茶番ですよ

魔術道具に興奮したり、地脈スゲエって気付いたり、英雄を呼ぶ触媒見せられたり、凜嬢がかわいかったり、衛宮切嗣の経歴を見てワクワクしたりとこれから起こる聖杯戦争に向けてテンション上がってる鷺津翔です。

今は時臣氏が英雄を召喚するってんで与えられた部屋で二十分割、かつ十秒ごとに画面が切り替わる空中モニターが送ってくる画像を眺めてのんびり監視している。全六十機のステルスフロートサーマルカメラと妙な熱源を探知したら自動でお知らせしてくれるシステム込。今ならなんと一機で4980円(税込)で御提供させていただきます！

なんとこれ、この世界で作りました。ぶっちゃけるとオーバーテクノロジーなんてレベルじゃないんだぜ！

でも俺は信じてるんだ、後三十年くらいしたら大きいけどフロート試作品が出来るって！

「だからもうちょつと早めて二十年後くらいにしてあげようって親切心さー！」

他人がそれをお節介というのは知っている。だがしかし、俺はお節介の塊のような人間なのだから仕方があるまい。

数少ない親戚の祝い事とか全技術力とコネと金を奮発して子供がドン引きするくらいのもを上げちゃうのも仕方のない事なのさー！

過去最高で・・・家かな？ウチの娘の結婚式で盛大な家をプレゼントした。勿論娘と新郎の意見をたっぷり取り入れ、子供の成長にも対応出来るようにした素晴らしい家だ。

息子は結婚祝いに家じゃなく車を欲しがったから有名車メーカーに技術提供して試作品(アニメ的な意味の)をくれてやった。いやあ、案外俺の知識って車でも行けるんやね・・・まあ分かり切った事だけれども。

さーて、送られてくる画像を観察する仕事が始まるおー！

「そんな雑種。この我オレにふさわしいこの時代の服装を見繕っておけ」
部屋にやってきた黄金で出来た鎧をきた金髪赤目の偉そうな男が
なんか言ってきた。・・・ 葵さんと凛嬢を見送ってから世界で最初に脱
皮した蛇の抜け殻で調べただけ、もしかしてこいつがギルガメツ
シュウ？

前世の人の記憶的にはスツゴイカリスマ！みたいな感じだったけ
ど・・・そうでもないなこれ。

「正直服は自分のセンスで選んだ方がいいと思うんですがそれは」

「む？よもや雑種、この我に意見を述べるつもりか」

「意見というより提案ですけどね。まあ適当な服買ってくるんでその
服着て自分で探してきてくださいな」

「・・・貴様、名は」

「アサシン、鷲津翔」

「では貴様、今すぐとって来い」

「名前聞いたんならそれで呼べや・・・つーか、まだ店開いてないから
ね、明日ね？」

「貴様、この我に待て、と」

「それが今の世の中だからね？その鎧でその辺うろつくなら好きにし
てもいいけど？」

つーかなにこの駄々っ子、むっちやイラつくわあ。こんなんが王で
俺が民だったら謀反起こしてるわあ・・・

「ふん、まあよい雑種よ。貴様の宝具は如何なものか、見せてみよ」

「え？宝具？まあいいけど」

首のドッグタグからリングを取り出した瞬間目の色変えて掴みか
かってきたんですけど、マジで何なのこいつ。

「貴様！これをどこで手に入れた！」

「どこって、しいて言うなら貰った」

「貰っただと！貴様、これが何なのか理解していないのか！」

「いや、リングだろ？知恵のリング。人間が全裸でフライアウェイす
る切っ掛けになったって奴だろ」

「・・・貴様。この我が探し求めてもなお見つけられなかったもの

を・・・」

「やらんぞ、こいつは有能なんだ」

「有能な事程度分かっている！・・・だからと言って何故このような奴の手に・・・」

「そのことなんだけどき。これ、結構数あるらしいぜ？」

「・・・ソレは真か」

「イエス、ちよつと待っててくれ」

リンゴにこの世界に遺品があればそれを3D地球儀に表示してもらう様に指示して机の上に置く。

数秒もしない内にリンゴが輝き、真上に黄色い地球の3Dモデルを表示し、パツと見四か所に光る点が配置されている。その内の一つが日本にあるしここなのだろう。

「こ、これは・・・」

「ということ、この世界に三つあるらしい。場所覚えて聖杯戦争勝って受肉でもして探してみれば？」

「ふん、元より聖杯などこの我の物。我が蔵に再び収めるだけに参加したようなものよ・・・しかし、良い案だ。鷲津よ」

「ども。とりあえず、今日はもう眠ったらどうです？」

「ふむ、雑種共が群がる催しにしてはなかなかどうして・・・では明日、我の服を用意しておけよ」

「十一時半くらいには用意しておきますよ、なんか適当なの」

何故か高笑いしながら消えて行く彼を見送り・・・

「で、アレはマジでギルガメッシュだったのか・・・」

未だ信じられない俺です。いや、だってさ、ほらさ・・・生で見るともっと凄いのかと思ってたんだよ・・・あんなだったらISが第二世代になった事で終わった女尊男卑後に就任したアメリカ大統領の方がカリスマあつたわ。

中継で演説見てたけど思わずアメリカに住民票移して投票しようか悩んだくらいの人だったからな。それと比べれば所詮は過去の人間、という事か。

とりあえず、その辺の服屋に入って今のセンスを調べ・・・イケメンなら何着ても似合うだろうと放棄した。

白いVネックの七分？六分？くらいのシャツ。ズボンはなんか黒地になにか模様のあるスラックス。

ついでにその辺の本屋で買った漫画雑誌と観光雑誌を小脇に抱えて遠坂家に戻り霊体化を解除したギルさんに服を投げ渡してソファーに座って観光雑誌を捲る。

さーて、リアルゴルゴならどこからどこを狙うんだろうねーと思いながら観光雑誌についてた地図を机に広げて赤マーカを片手にハアハアしてる。

「雑種、一体何を発情しておる」

「いやあ、アサシンのにはねえ。なんか知らんけど興奮してきた」

「・・・意味が分からぬぞ」

「暗殺者の気持ちか王に分かれて堪るかってんですか。かく言う俺も暗殺者とは程遠いけど」

「アサシンとしてのスキルもあのリンゴの恩恵か」

「んいや、あれはリンゴ入手前の修行。リンゴはどっちかっていうと知識だな、伝承通りの知恵を与える代物だからな」

「ではもういらんのではないか？どれ、我に献上しても」

「誰かに与えて貰って嬉しいかい王様？探検家なんだろう？自分の手で掴み取ってこそその宝だろう？」

「ふん、雑種如きで言うではないか」

「場所は教えたんだし、後は勝手に受肉して探してきてくれよ。俺を巻き込まずにな」

そんな話をし、漫画雑誌を適当にめくってたギルガメツシュが立ち上がり「少し現世を見物してくる」と言って出て行ってしまった。

なんとというか、口調が高圧的なクリスってだけだな。クリスと言えば・・・うん、この話題はやめておこう。

遠坂庭を見下ろす道路の脇に立つ二人の男。カソックを着た男と、白いコートを羽織りフードを目深に被った男、というか俺だ。

「アサシン、では頼むぞ」

「あー、うん、俺からしてみれば杜撰な計画なんだけど・・・ま、いいか」

マスターとその師の作戦にため息を吐きながらリングゴを取り出して、真っ直ぐ上に掲げる。

リングゴを中心に黄金に輝く球体が広がり、やがて見えなくなったところで俺の前に黒い肌に黒い腰布を巻き、白い髑髏を模した面をつけた人影が現れる。

「・・・これは」

「遠坂家にある聖杯戦争の文献読んで、普通のアサシンはこんな外見してるって言うじゃないか。だから俺の宝具で幻覚として作り出した」

「なるほど、アサシンらしい宝具だな」

「いやー、マジこのリングゴ便利でねー。ぶっちゃけこれがある使い方をすれば何もせずに勝てるレベル」

「・・・では何故そうしない。裏切つてしまえばいいだろう」

「なんでか知らないけど折角お呼ばれしたんだし楽しみたいじゃない？裏切るなんて心が痛むこと、俺にはとても出来やしないよ」

リングゴで他マスターに「サーヴァントを自害させよ」ってやるのは確かに簡単だけど、折角俺でも知つてそうな英雄達と戦える舞台なんだぜ？乗らないわけにはいかないだろ。

それに裏切りなんて、考えもしなかったぜ！

「というわけだ、偽アサシン君、ゴー！」

なんて言つて指示すると「容易い事よ」とか言つて駆けて行った。ごめんな偽アサシン君、ごめんな・・・

「そしてこれで観察してみましょー」

「・・・アサ、シン？」

「疑問に思うだろー？でもこれでアサシンらしいんですよ」

ステルスフロート監視カメラを解き放ち、空中モニターに送られてくる映像を表示する。

アサシン君がスタイリッシュにダンスしてるわ・・・スゲエな、マ

ジでアニメだこれ。

「ま、後は流れて」

「・・・あの幻影は魔力で作られた結界が見えるのか」

「リングは魔力とか把握してるっぽいんで、アレ使えば俺でも魔術使えるんじゃないかな?」

「・・・凄まじい宝具だな。キャスターの適正があるのも頷ける」

「もうリング単品でいいんじゃないやね? って感じ・・・あ、偽アサシン君お疲れ様です」

モニターで飛んできた剣やらなんやらが地面に着弾して土煙を上げた事を確認し、リングをお願いして偽アサシン君を消してもらおう。

「これで作戦その一が完遂。ではその二へ移行しようかマスター」

「ああ、私の言峰教会への避難だな」

「じゃ、俺その辺にいる使い魔探して他のマスターの住居洗ってくるわ」

「くれぐれも、見つからぬようにな」

「一応気配遮断のスキルもあるし、いざとなれば宝具もある、大丈夫大丈夫」

「では、お互いすべきことを為す事としよう」

「じゃ、またあとでなマスター」

霊体化して天然ステルス状態へと変身し、森を適当にフラフラと歩く。

元々遠坂庭付近に飛ばしていたサーマルステルスフロート監視カメラからの報告を待ちながらちよつとした宝物探しの気分だ。

監視カメラからの連絡で行ってみると、なんと蝙蝠がカメラを無理矢理取り付けられていた。

しかし、電子機器で良かった。これなら俺でも逆探知できるぜヒヤッハー!

「いやーまったく、散々ハッキングされてたのにこの後に及んで電子機器とは・・・逆に俺を釣ろうって?」

イイじゃないの。仮にも英雄認定された俺に喧嘩を売るとはな・・・

「という事で探してきましたアインツベルン城」

森に面した道路のガードレールに腰かけて森の奥にある城を眺める。

いやー、あの城って魔術で見えないようにされてきて、リンゴさんが勝手にナニカしてくれなかったら気付かないところだわ。その辺に捨ててあったチャリに乗ったままスルーするところだったわ。

乗り込んでもいいんだけど・・・アサシンさんはさっき脱落したってことになってるし、別サーヴアント装うか？装えてアーチャーなんだけど王様でバレバレなんじゃないかなあ・・・

よし決めた、ただの人間装おう。リンゴ使ってサーヴアントじゃなくて人間に見える様にしてー、剣を腰にさしてー、っと、なんか、どこから見られてる気が・・・よし、逃げるか。

逃走を決意した直後、森の奥から何かがこちらに走ってくる気配が強まったのでおもむろにチャリに跨り全力で漕ぐ。

カーブでちらっと後ろを振り返った俺が見たのは青いドレスに所々に鉄の防具をつけた金髪の女性がガードレールを飛び越えた所だった。

悪いなセイバー、これも生きる為なんぞな。逃げさせてもらう！

「というわけで、セイバーは森の中の城が拠点でした」

「つまり、アインツベルンがセイバーのマスターか」

「衛宮切嗣かもしれないですよ？」

「ふむ、その両方の可能性を追うことにしよう。報告によれば衛宮切嗣とは何でもするのだろう」

「後、聖杯戦争の資料読んでたら聖杯を用意するのがアインツベルン、みたいなこと書いてあったんですけど？」

「うむ、我が遠坂家は土地を、間桐は令呪を、アインツベルンが聖杯を各々提供する事なっている」

「して、その聖杯はどこに？」

「アインツベルンの保有するホームクルスの中だ」

「ちよつと攫ってきますっ？」

「・・・そういえば、アサシンだったな君は」

「なんか酷いこと言われたんですがそれは」

「時に、璃正氏から学んでいる八極拳の方はいかがかな？」

「いやー、見事に伸び悩んでますよ。気ってなんですかね、もうホント・・・」

「しかし、地脈は理解できたのだろうか？」

「地脈の力借りれてませんし、力の利用はなんとなく分かるんですけど気ってのはもう、なんだかさっぱりで」

「綺礼から聞いたが、宝具を使ってみては？」

「いや、これ使ったらなんでも分かっちゃうんで嫌なんですよ。人間なんでね、全知全能とか荷が重すぎて。宝具は俺にとっては便利な道具程度なんですよ」

「通常なら宝具とはその英雄を象徴するものなのだが・・・まあ、君に關しては常識を当てはめる方がおかしいか」

「なんで俺、ここでも同じような扱い受けなきゃいかんのよ・・・」

息子や娘が結婚する前の結婚相手に「お父さんどんな人？」って聞かれて必ず『父親ってこんな存在』って常識は捨てていた方がいいよ』って答えてるのを知った時くらい凹むわあ。

原作的衛宮さん家の戦争前ですよ

この時代の部品でオーバーテクノロジーを生み落したり、偉そうな金で出来た鎧を着た金髪赤目の男に絡まれたり、リングについて少し話したり、金色マンに服を買い与えてやつたり、観光雑誌のマップで遊んだり、茶番だったり、見えない森のお城を観察したり、青いドレスを着た金髪の女性から何とか逃げ出したり、時臣氏に場所を報告したり、凹むこと言われたりと楽しんでる鷺津翔です。

寝てたら無表情の神父とその隣で楽しそうな顔を浮かべるアルビノ美人さんの夢を見た俺です・・・ちよつと千冬さんとの生活を思い出してほっこりした俺です。

そんな気分のまま鍛錬をしていた所マスターから声がかけられた。

「アサシン・・・パスからお前の記憶が流れ込んできたのだが」

「ああ、俺の方の夢ってマスターのだったのか」

「・・・マスターの記憶がサーヴァントに流れるという話は聞いたことがないのだが」

「そりゃ、だってほら・・・俺って完全に例外ですし」

「・・・そうだったな、忘れていた」

「んで、見たのはどこの記憶？」

「そうだな、あれはお前の人生を映画のようにした総集編の様な物だったな」

「・・・死ぬ前までであったのか」

「いや、お前が遺跡とやらで世界を救うと言っていた辺りまでだ。子供がいると言っていたからその後も生きていたのか？」

「まーな、束さんと千冬さんって言って分かる？彼女たちと他の所で動いていた奴らと一緒に腕をささげて世界を救ったわけだ。ちなみにこれがその代償な」

左袖を捲り、人工皮膚を剥がす。めくれた先から見えるのは真っ黒の腕。呼ばれた直後に性能を調べてみたら死ぬ前に作った年寄用に調整した軽くて超丈夫な自信作・・・重くなるから武装とか付けられなかったからただの高性能な義手だ。

「だよ、持てうる技術とコネを全て使って作ってやった当時世界最高峰の義手だぜ！……それ以後の世界は知らんから何とも言えないけども」

「私にはよく分からないところだ……しかし、なぜ世界を救ったのだ？」

「あれ？記憶で語られなかったの？」

「直接聞かせてくれ」

「いやまあいいけど……最たる理由はこれだな、俺の知人らはみーんな避難を呼びかけても絶対避難しなかっただろうからだ。自分が助かって誰かが死ぬくらいなら自分が助けてやる！って連中ばかりで、なら知らんうちに助けてやろうって思ったのさ」

「……すまない、意味が分からない」

「だろー？俺も意味が分からない」

「……英雄とは一体何なのだ」

「んなもん俺が知りたいくらいだ。英雄ってなにさ、世界を救った？俺は世界ってよりも人類救ったってだけだぜ？なんでさ」

「いや、それも十分凄い事だろうアサシン……」

「いやいやいや、だつて世の英雄ってのは一国の王だつたり高名な騎士だつたりするだろ？……俺なんて一般市民だぜ」

「世に三人しかいない貴重と思われる男の内の一人在一般市民と言えるのだろうか」

「……何気にしつかり俺の時代の事理解してくれてるのね」

「ある意味では一国の危機とも呼べる状況を救い、かつ人類を救ったのだろうか？立派な英雄ではないか」

「ぜーんぶノリと勢いに任せてだからよくわからねえってのが現状。死んだと思つたら呼び出されたとか訳分からないわ」

「……聖杯に望む願いはあるのか」

「んー？強いて言うなら人類宇宙進出の活性化だな。世界救った後もやってたし、束さんの夢でもあったしな」

「他者の夢を叶える意味が私には分からないのだが」

「ただの他人じゃねえよ。見方を変えれば俺にあの楽しい状況を提供

してくれた一人なんだぜ？まあ一番はリングオなんだけども、それでもあの人には感謝もしてるんだよ。んで、一緒に行動してる時にあの人の夢が俺の夢にもなったんだ」

「良い影響を受けたのだな」

「流石神父さん、いいこと言うね。感化されたとか、悪い言い方なら洗脳されたって所だけど、俺としては満足してたから問題はないのさ」

「・・・アサシン、お前も私の事を見たのだろう？どう感じた」

「と言っても俺が見たのはいつも通り無表情のマスターと笑顔の似合う白い奥さんっぽい人が歩いてるところだけだからなんとも」

「・・・私は、幸せそうに見えたか」

「どっちかっていうと困惑？そんな雰囲気だな。んで、それ見て奥さんも楽しそうにしてたな」

なんか本気で悩んでる。目頭抑えて俯いてる。なんだ？記憶でも思い出したのか？思い・・・出した！って感じなのかな？

「やはり・・・思い出せない」

「あっちゃー思い出せなかったかー、あっちゃー」

「アサシン、令呪をもって命ず。じが」

「やめてッー」

まさか割とガチめな雰囲気で令呪使われるとかやめてくれよな。俺生かしておくアレよー、宇宙行けるんだヨー？ホントウダヨーウソジヤナイヨー

俺の最近の修行には動きがない。

精神修行の様に自分の中にある気って奴を見つげるためにひたすら座禅を組んでいるだけだ。勿論監視云々は何かあれば機械が自動で教えてくれるので半ばニートと化している。

しかし、リングオ知識で多少は分かると言ってもこればかりは俺の体。いつもの様な知恵があればなんとかなる技術系だけじゃないだけに新感覚だ。まあそれだけでさっぱり進まないんだよねえ・・・

「雑種、何をしている」

「気つてのを探して」

「気……ふむ、魔力とは違うのか」

「違うつばい。まあ今の体を構成する魔力をそれっぽく使えるんだらうけどそれは甘えだろ」

「雑種の癖に良い心がけだと褒めてやろう」

ちらりと目を開けてみればソフアーに腰かけてワイングラスを傾ける初めて会った時の髪の毛をオールバックから降ろして一見ただの好青年と化している。

「参加者が揃ったというのに他の者共は穴熊を決め込みおって。余程この我から行動して欲しいようだな」

「……行っちゃう？相手の拠点爆撃しちゃう？」

「抜かせ雑種」

提案があつさり拒否られてしょんぼりつすわ。労せず勝てると思うんだけどなー。

「この我が出向くのは真の英雄の前のみで良い」

「王様に謁見するのも大変だなあ」

「貴様もその内の一人なのだぞ？」

「えー、俺はいいよ。そこまで進んで叶える望みでもないし、マスターもマスターでなんかやる気ないし」

「何故来た」

「なんか呼ばれたから。居座ってるのは楽しそうだから」

「道化め」

「何なら芸の一つでもしてみましようか？旦那」

「やめろ煩わしい」

「アツハイ」

英雄王おこだお。

ってかワイン片手に優雅に新聞読むなよ、なんか違和感しかないわ。

「王たる者市民の生活の情報も仕入れんな」

「貴様何者だ！絶対偽物だろ！」

「よろしい、少しだけこの我が王というモノを教えてくれてやろう。心して聞くがよい」

「だが断……ッ！なんだこの鎖！超カテエ！」

「我が友だ、雑種如きに千切れる物ではないと知れ！」

「え？王様物が友達なの……その、なんか、ごめんね」

「一つ、王たる者孤独でなければならぬ！」

「痛つたい！キツくするのやめて貰えませんか！つてかこの鎖何処から生えてきてんの！」

「王たる我はこの程度で怒らぬ！」

「王様おこななの？ねえおこななの？」

「訳の分からぬ言葉を吐くなッ！」

「激おこオッ！」

あ、これ死ぬんじゃね？全身絞殺と『王とは何か』って言う演説のダブルパンチの意味が分からない死因で脱落してしまう……千冬さん、助けて。略してチフケテ。いややっぱこなくていいです。

「……いや、うん、時代を感じるよ」

俺は今、自販機の前に立っている。服装はその辺の服屋で買ったスーツと手に持つのは同じく適当に買った営業鞆の様な物。

冬木市新都と称される遠坂庭から見て赤い鉄塔の向こう側。高いビルとかあったりして高度成長的な雰囲気ガンガン出ていてゲーセンとかある個人的に楽しい街。

俺が初めて新都に来た時にはゲーセンと財布の小銭しか見えてなかったから気付かなかったが、

「自販機でタバコが売られてるとかマジパネエ」

そりゃコンビニの前でタバコ吸うヤンキーが多発するわけだわ。当時というか今はコンビニくらいしか夜明るい場所ないし、大勢で集まって話すという謎の一体感がいいのだろう。

ネットで「昔はこうだった」的なまとめサイト見てしか知らんけど夜パトロールしてるとちよいちよい見かけてなんか面白い。

なんて一人でニヤニヤしていると背後から「あの、少しいいですか」と声がかけられた。

振り返ると、そこにいたのは報告書で散々見た衛宮切嗣その人だっ

た。

一瞬似た人？とも思ったが目が完全に切嗣っていたので当人だと分かった・・・のだが、何故だ、何故俺に声をかけた？まさか、リングを使った「周囲の人間に俺を人間だと思わせる」というチート能力が見破られたッ！

「ああ、すみません。少し、タバコを買いたいんです」

「あ、ああ。気が利かなくてすみません」

なんだろう、一見普通のサラリーマンを幻視してしまったがこいつはかのリアルゴルゴなのだ、いつ懷から銃が抜かれるかなんてわかつたものじゃ・・・いや、今この人銃持ってねえや。そのくらいなら分かる。

「ところで、自分ってタバコ吸ったことないんですが・・・おすすめの銘柄なんてあります？」

「え？ああ、自分も買うのは随分久しぶりでね。でも、このパッケージは見たことくらいあるだろう？」

「ええ、有名な奴ですよ。良く道端に捨てられてる」

白と赤のパッケージが特徴的なそのタバコは俺が千冬さんとヒヤッハーしている時代でも警備兵が吸っていたほどだ。まあ、微妙に名前が違うんだけど・・・

「個人的にはこれだね。本当は台湾の凄い不味い奴を吸っていたんだけど、手に入らなかった上に家族も出来てしまってたね」

「今は単身赴任か何かで？」

「・・・まあ、そんな所だね。君は・・・新社会人かい？」

「ええ、親父がいい大人なんだからってジツポ？のライター寄越してきましたね。それで悩んでたんですよ」

ライター自体は本当に父親が二十歳の誕生日に送ってきてくれたものだ。黒服さんが持ってきたことには驚いたが、何より添えられていた手紙が胸を熱くしてくれた。返事に空母から見える地球の写真を送ってやった。

しかし・・・安いな、タバコ。俺の時代じゃこの三倍はあったな・・・「ま、何はともかく吸って確かめるのが一番だよ。自分の舌だからね」

パッケージの包装紙をはがし、銀紙を契り、箱を叩いて頭を出したタバコのフィルターを咥えた・・・俺はすかさず胸ポケットからライターを取り出して火をつける。

そんな俺に少し頭を下げてから火にタバコの先端を触れさせ火を移す。

うーん、渋いねえ。俺はこんな大人にはなれなかったから憧れも抱くわ。

「ああ、悪いね。邪魔をしてしまった。じゃあ、楽しいタバコライフを」

「ええ、単身赴任も大変でしょうけど頑張ってください」

しかし、世の中何があるか分からないな。敵マスターなんだから殺しておけばよかったと思う反面・・・彼がマジでリアルゴルゴなのだろうかという疑問もある。去っていく背中なんて哀愁漂うサラリーマンそのものじゃないか・・・

しかし、タバコつて不味いな。ライター貰った時も結局吸わず仕舞いだったから初めてだけど、禁煙だこりゃ。

そして俺はそつと彼の後をステルスフロートカメラに追わせた。

悪いな、これも戦争なんだな・・・いや、彼なら言わなくても重々理解してるか。

フロートカメラで切嗣さんがライフルもってキャツキヤしてたり、銃に手を添えて泣いたり、キツめの美人さんとキスしてたりと見てはいけないシーンを覚えてしまった俺です。

どうしよう、思わず録画してしまったが・・・どうしよう。とりあえずネットに上げるか？いや、かわいそうだから止めておこう、社会的に死んでしまう・・・いや死んでるようなものだけでも。

そんなモヤモヤした気持ちを抱いて夜の繁華街をパトロール。

なんでも殺人鬼がいるとか言う話で璃正さんから「犯人は夜に犯行を行っているようなので、怪しい気配があればすぐに頼む。中々手強い者のようだからね」と言われてしまった。

道中にチラッと見かけた金髪の黒服の人と白髪で真っ白の服を着

た美人の二人組がいたのでこっそり後をつけて行ってみた。

街を歩いたり、夜景を見たりとただの観光だったが、俺はある場所での光景に目を奪われることとなる。

夜の海。

月を背にした白髪美人の可憐な様を。

まあ真剣素振りしてる千冬さんには劣るんですけどねー。

とかやってたらいきなり金髪黒服の人が振り返ってこちらを見た。

やっべ、バレた？と思いつつも体が固まってしまったが、その人は白い人を連れて何処かへ行ってしまった。

いや、俺も気付いてたよ？殺気というかやる気がガンガンな人が一人いるって。でもやっぱり男より美女やん？これから殺し合いやん？目の保養って大事やん？

はいはい行きますよ。とりあえずマスターにパスで話を通しておき、美女二人組の後をこっそりついて行き、コンテナ群の影を縫うように歩いていく。

さーて、英雄が集まる港に紛れ込んだマスターでもない人間をハントしようかね。そう、君の事だよこの泥棒猫ッ！

原作的港戦ですよ

マスターの記憶を夢に見たり、英雄王さんに縛り付けられたり、タバコの自販機の前で面白がってたらリアルゴルゴさんと遭遇したり、美人二人の後を追跡したりとそろそろ聖杯戦争がはじまりそうな雰囲気ワクワクしている驚津翔です。

スーツからジャーゾンアサシン装束に身を包み、フードを深く被る。顔、切嗣さんにさつき見られちゃったし。何よりノリで。

あつちでドンパチやり始めた二人は放置してあちこち散策することにした。

ひとまず一番全体を見渡せる大きなクレーンの一番上に立つ。

サーマルゴーグルを使って辺りを見渡せば何もせずに倉庫の屋根の上に一人発見。

何やら見られている気配がしたのでコンテナの方に目をやるとその上に寝そべっている人物が一人。

とりあえず人差指を口の前に添えて悪役感を出してみる。

そしてそのコンテナの上の人から目を反らしてちようど反対側にいた人影を発見する。

というか倉庫の人だけ立っててなんか笑えてくる、戦争やってんだぞってツツコミたいけど今はやめておこう。

場所を良く覚えてサーマルゴーグルから水泳用のゴーグルに変えて準備万端。

クレーンの天辺で膝を曲げ、トウツ！と海へ向かってジャンプしてオリンピック選手もビックリの無音着水を決めて三番目に見つけた人影の元に泳いでいく。というより風潰しだ。サーマルゴーグルの視界だけじゃわからねえよ。

なるべく音を立てないように海から上がり、こっそりと移動を始め、のっそりとコンテナを登っていく。

コンテナの端から少しだけ頭を出して様子を窺うとこちらに背を向けて片膝立ちしている女性の姿。

リングを使って辺りの通信機を遮断をして、そっとポケットから取

り出した発信器を背中に軽く投げ、くつつき虫みたいな外見したソレが服に引っ付いたのを確認し、フードをかぶり直して拡張領域からブレードを取り出して彼女の顔の横にそっと添える。

「動くな。お前はマスターか、あるいは違うか。どちらだ？」

俺が紳士的に声をかけたのまでではない。だがいきなり振り返って銃をこっちに向けるんじゃない。咄嗟に足で銃を蹴り上げて相手の胸にヤクザキックをして倒し、その腹に師範に教わり、そして八極拳で学んだことを生かして体重全乗せした震脚モドキを叩きこむ。

「まあ焦らない焦らない。狙撃が生業なんだ、よく分かってるだろうねえちゃん？」

「ケツ、カハツ・・・あなたは、いったい」

血を吐きながらこちらに聞いてくる女性。うわっ・・・俺の蹴り、強すぎ・・・？

「同業者みたいなものだろうな・・・え？ステアー？こりやなんというか、妙な銃を」

「・・・なにか、目的」

「まあ言っちゃうと、君だよ。マスターじゃないのにここにいて、狙撃する気満々と来た。どっかのマスターのお仲間だろ？と云うことは？」

「ッ、人質！・・・ですが残念でしたね、私に人質としての価値はありませんよ」

「それはそれで別にいいんだよ。人質として使えなかった場合、君には幸せな人生を提供してあげよう」

「・・・一体何を考えているのですか」

「特に何も。人質にして、使えなかったらポイ、なんてあまりにも報われないだろう？」

悲しいことに、利用するだけ利用して後はポイ、と云うのが世界の裏では良くあることだ。

ある時は、世界最強の人間を作ろう！とかいう組織を潰しに行った時、千冬さんがその成果とされる少年をぶっ潰したんだが、完成したその彼以外はもう、俺たちが踏み込んだ時には・・・その彼には「来

るのが遅い」と怒られ、まあ子供の様に扱って育てたりもして、結果として一夏君より英雄することになった。ま、まあ一夏君はみんなのヒーローだったからそれでいいんだけども。

そんな彼も嘆いてた。「自分は一夏さんの様に全てを救えない」と。世の中そんなもんとかそういう前に、見る世界が違うんだからしようがないのだと熱弁してたら千冬さんに叩き潰された。これは家庭の闇だ。

「というわけで、些細ながらも幸せに過ごして貰うぞ！俺のためにな！」

「意味が、分からない・・・」

「それが売りみたいなどころ・・・セイツ！」

咄嗟にブレードの腹を顔の横に動かした直後、発砲音とブレードから伝わる衝撃を感じて狙撃されたことを理解する。

「嘘はいけななおねえちゃん。ちゃんと人質としての価値があるみたいじゃないか」

少しだけ狙撃された方向を見てから彼女の方に目をやるとコンテナから飛び降りている背中が見えた。マジか、これは本格的に捕縛しなきゃダメなのか・・・まあ、発信器は後ろから近づいた時にくっ付けてあるしステルス機に追わせよう。

よし、狙撃してきた奴はもう別の場所に向かっているだろうから倉庫の上で突っ立っている人の所にでも行くか。

そう決めて移動を始めようとした直後、雷鳴が響き「双方武器を収めよ！王の御前である！」と野太い声が響き渡った・・・魔力とか科学とか使わずにこの音量、王様ってスゲエな。

征服王だとかイスカンドルだかライダーだとか自己紹介してる・・・ドヤ顔してるだけの英雄王とはまた違う王様だな。どっちかかっていうとこの王様の方が俺は好みだな。

なんかマスター同士で会話してたり、「見るだけのサーヴァント、出てこいやあ！」みたいなこと言ってるし・・・仕方ない、出るか。と思っただけで英雄王が街頭の上に若干おこ顔で現れたり・・・もう俺、出て行かなくていいやあ。

「やっぱ生で見ると迫力が違うねえ……ぶつちやけ勝てる気がしねえわ」

飛び降りたクレーンの天辺に再び登り、ハンディカメラ片手に眺めているのだが……空中に無数の黄金の渦が浮かび上がり、その一つ一つの中心から武器の先端が頭を出している。それだけでも十分だというのにその渦からかなりの速度で射出され爆発するんだからもう……宝具武器つてスゲエ。どれか一つリングと交換しない？

俺の時代にあんなのいたら……いや、束さんと千冬さんなら何とか出来るかも。そう思わせる二人がおかしいんだってことは理解している。いるんだけど……ちよつと見てみたい気もする。千冬さんなら第三世代のISでもあの飛んでくる武器なんて吹き飛ばせるだろうし、というかあの人飛び道具無効のスキルでもついているんじゃないかと……まあ今はいないんだ、いない人に頼るものじゃない。

「俺だったらアレどうするか……つてかあの黒いのも厄介なんだよなあ、掴んだ物全て宝具化ってなんだよ、原典どんな逸話だよ謎すぎるわ……」

英雄王と対峙する黒い騎士。いや、リングサルベージの前世の人の記憶では有名な騎士で、その場にいる緑色のタイトの赤と黄の槍持った人の伝承が他の話に頭出したらしいんだけども、その場合パワーバランスはどうなっているのか少し興味が出てきた。

「うん、なんだか楽しくなって気だぞお！やっぱり乗り込もうかな？乱入するのにクレジツトは必要か？リアルなら無料！しかしタダよ！怖いものは無い！うーん、どうしよう」

そんな感じでグダグダやってる最中にも港はドンパチの嵐が収まり、英雄王が去って行った。

よし、荒らすか！とカメラを仕舞おうとした時だ、斬れて落ちていた街頭の支柱を掴み取って青いドレスに着替えた黒スーツの美人さんに襲い掛かった……どういう状況？つてか前世の人の記憶も完全じゃなくってストーリーあんまり覚えてなくてキャラだけ分かっている

のが現状だし、どうすりやいいんだろなこれ。

あ、ランサーが助けに行った。

お、ランサーが令呪使われて青いドレスのセイバーに攻撃したぞ。

ライダー観戦してるだけだし、セイバー左手負傷してるし・・・よし、行くか。

「ヒヤッハー！俺も混ぜろやー・・・え？」

クレーンからダイブし、黒い騎士でも踏みつけようと思っていたのだが雄々しく叫ぶ征服王が乗る牛が引く戦車が俺を黒い騎士ごと跳ね飛ばした。

車田飛びの如く飛ばされ、地面を何度も転がる。

「よ、鎧が無ければ即死だった」

牛に跳ねられる前に咄嗟の判断でISを装着したのが功を相した・・・しかし一撃でシールドエネルギーが消し飛んだぞ。白影だらってそれ理由にならねえぞ！

俺のすぐそばでは地面に手を突き、まるで生まれたての小鹿の様に震えている黒い騎士が消えて行った。

「・・・お主、何がしたかったのだ？」

「おま、おまえ・・・お前が突っ込んでこなきやセイバーにでも加勢しようとしてたんだよ」

「そうだったのか・・・してお主、我が軍門に下らぬか？」

「なんでよりもよってこんなわけのわからない奴を勧誘してるんだよーヤケか？ヤケになったのか！」

「いや、こういった者もある意味では必要になるぞ？」

「なんか楽しそうに会話してるどころ悪いんだけど、俺は俺でやることがあつてだな」

「ふむ、そうか・・・では次に見えた時に戦おうではないか！」

「征服王、牛に轢かれたこの恨み、次にぶつけてやるぞ畜生め」

そして爆笑しながら空を駆けていく・・・え？待って、なんで牛が空走るの？サンタの鹿みたいな奴？なにあの牛怖い・・・そして空を飛んで雷纏ってる牛、少し食べてみたい。

そしていつの間にか解散になったのか俺以外の人の姿は港に存在

しなかった。凹むわ。

とりあえず俺はそつと発信器からの信号をステルスフロート機に追わせてみた。

空飛んでつた連中は・・・俺も空飛んでりやその内見つけるだろ。

「結果として、鷺津。君がなんのサーヴァントなのか分からない、という状況を残したわけだ」

「あれだけ見たら意味不明だからな、俺」

無事に遠坂邸に戻ってきた俺は飛び出す前にクレーンに設置していたカメラの映像を時臣氏とマスターに見せていた。軽い黒歴史気分だが別に毎日が黒歴史だった頃と比べればダメージは少ない、むしろ誇る。

「キヤスターでもないだろ、これ」

「いや、何も知らないものから見れば英雄王がキヤスターの様に見えるだろう」

「あんな魔術あつてたまるか！科学でも出来・・・」

いや、拡張領域から直接射出すれば、ワンチャン・・・

「あのような事が出来るのか、アサシン」

「やってみなきゃ分からないけど、可能性はゼロじゃない。調整したりすれば出来る・・・かも」

「恐ろしいな、科学とは」

「まあ未来の科学ですけどね。意味の分からない科学」

「意味が分からないのに調整が出来るのか」

「何とかやっています」

だってリング知識が勝手に指動かすんだもん！そりや俺だってある程度は自力で出来るけどISを一から作るなんてリング知識無しにはできない芸当だ。

うん、生きてて上達したのは見事に物理で殴る系だけだ。技術系は全部リングゴだしなあ・・・

「アサシン。事後処理をするのを手伝ってくれ」

「港の被害状況も酷かったしなあ・・・俺に出来る事なら手伝うぜ」

「では録画していた映像を」

空中モニターを出して映像を開始する。

報告書を書いているマスターの横で、俺は俺で狙撃してきた人物を画面の中で追う。

いないんだなあこれが・・・流石本職、片手間の俺とは違って徹底してやがる・・・だが、そこまでの男が何故人質にしようとした彼女を助けた？こういう事態にそういう人材を切り捨てられる人物ではないのか・・・どういふことだ！まるで意味が分からんぞ！銃使いが二人、来るぞマスター！・・・駄目だ、俺もう疲れてるんだわこれ。「マスター、俺寝るわ。起きたら時間によってパトロールしてくるわ」「うむ、ぐっ苦勞」

人質予定の人の発信器を追っていたステルスフロートが止まった場所はどうかやら森の中の城・・・知ってた。

寝ようとして部屋に向かったら英雄王が不機嫌面で酒飲んでたけどそんな事は無視してソファアーにぶっ倒れた。

なんか王様が言ってきたけど僕は疲れたよギルガメッシュ、なんだかとっても眠いんだ。ああ、空飛ぶ牛がお迎えに・・・

原作的ホテル発破解体ですよ

港をあちこち動き回ったり、人質確保しようとしたら阻止されたり、英雄スゲーとか見てたり、参加しようと飛び降りたら牛に轢かれたり、英雄王の空中からの武器射出を科学で再現しようという計画をしたり、そんなこんなで鷺津翔です。

朝の鍛錬をし。みんな・・・今まで知らなかっただろうけど、遠坂邸で食事用意してるのって俺なんだよね。俺自体が遠坂邸やら言峰教会を行き来したり忙しくも楽しい日々を過ごしているわけで、最近時臣氏にインスタント食品に関する情報を与えてみたら何故かテンションが上がってた。食べたがってたから食べさせてみたらドハマりしてた・・・多分、疲れてるんだろう。

「アサシン、この情報は確かかね」

「この時期に大金出す外国人はそうはいないだろうし、名前も一致してる。殺してこようか？」

衛宮切嗣さんから奪った情報にある魔術師の総本山、時計塔の教師であり、衛宮さんから盗み見た情報によるとランサーのマスターであるケイネス・エルメロイ・アーチボルトの名前が新都のホテルの名簿に記されている。

いやー、最近作られたばかりのホテルは早速パソコンが仕事用に使われていて助かるね。

「この情報を見る限り・・・フロア一つを貸し切っているのか」

「夜襲かけられても大丈夫なように色々仕掛けてるんだろうけど、無意味無意味。被害を考えずに殺すだけならビル壊しちゃえば終わりだしな」

「しかし、相手はやり手の魔術師。それさえも想定範囲内かもしれないぞ」

「その時はその時だ。一つ拠点をつぶしたってプラスに考えて行こう。とりあえず下見をしに行く」

「今夜仕掛けるのか？」

「いや分からん。下見の結果次第になるな。仕事はしつかりこなすか

「らいつも通り過ごしてな！」

「・・・少し、性格が変わってないか？」

「・・・・・・牛に轢かれたシヨックだよ」

「随分業が深いと見える」

「神父らしさは出さんでいいからほつとけ」

早速スーツに袖を通してネクタイを締めサラリーマン気分で教会を出ていく。二十五歳、職業は・・・暗殺者です。趣味は機械弄りです。好きなものは家族です・・・よし、これで就活決まったな。

不審者がいないか軽くパトロールし、昼食もとった俺は今、噂のアーチボルトが泊まっている冬木ハイアットホテルに侵入した。そう、リンゴを使って他人の認識を書き換え、俺は今清掃員として侵入しているのだ！え？本人？電気でビリビリにしてロッカーの中で寝て貰っている。作業服を着ながら背格好が似ててよかったとホツとしてもいる。

入れ替わる人間がアーチボルトの泊まっている上層を担当している事が前提条件なのだから少し難しかったが、それだけが難しいだけで後はベイビー・サブミッション、実際簡単だ。

替えのスーツが大量に詰まったワゴンを押し、エレベーターで上層へと向かう。

最上階三十二階、フロアを見て回り、昼になって出かけているのか誰もいないアーチボルトの部屋に入り手早くベットメイキングし、ゴミ箱を空にしておき、素早く出ていく。最上階で使われているのは一部屋だけなのでエレベーターで降りている最中にフロアの構造や部屋の見取り図を買って来た手帳に写し、仕事を終わらせロッカーの中の本人と入れ替わり、ホテルを後にする。

行き先は勿論言峰教会。マスターへの報告だ。

「で、これが地図な訳だ」

「・・・アサ、シン？」

「アサシンですが、何か？」

「なんとというか・・・地味なのだな」

「暗殺って結局の所誰かが誰かに殺された！って分かればいいから・・・」

「そうなのか」

「元々暗殺者ってそんなんだし、俺がやってた事も表に出しちゃいけない所あったしなあ」

「代行者、の様な物か」

「代行者ってなんぞ」

「ふむ、魔なる者を滅する存在。分かりやすく言えば悪魔祓い師エクソシストの様なものだ」

「・・・マスターの感じからして物理で殴る系の？」

「その通り。教会の敵となる異端を殺すのが仕事である・・・ふむ、アサシン。少しついてきてくれ」

そういつて地下へと向かっていくマスターの後をついていくのだが、マスターは地下の部屋が好みなのか、それとも好みが無いから地下の部屋でいいのか、多分後者なんだろうなーと思いつつも彼が開けた部屋に入っていく。

「代行者になる者は基本的に人を超えた実力を持つ者だ。そして正直な所、アサシン、君は既に私を超えている」

「・・・まあそうな、今の俺は仮にも英雄スペックだしな。人間に負けてもあの世で嫁さんに稽古つけられるだろうから嫌だな」

「・・・代行者が古くから使い、最近では使用者の減った一つの武器を君に教えよう」

華麗にスルーされたわけだが、暗いままの部屋の電気をつけると壁一面に赤いT型のなんかよく分からないのがびつしりと貼り付けられている・・・え、なにこれは（ドン引き）

そしてマスターがその一つを手に取り、力を込めるとT字の上の部分から刃が飛び出した・・・何それ欲しい。

「これが、その古い武器。黒鍵だ。とある代行者は聖書のページを刃に換装したりもするが、私は魔力で刃を編む」

「・・・で、最近行き詰ってる俺に何故それを教えたし？」

「いやなに、もしこれの刃を気で編んだらいかようになるか。それを

知りたくてな」

「まあ最近自分の気を少しだけ何とかできるようにはなってきたけど・・・出来るのか？」

瞑想してたら「あれ？俺ってもしかして昔に気使ってたんじゃね？」って発想になって試してみたら中国拳法A??になってた。なんでて？千冬さんとの嫁入り云々での真剣での斬り合いの時に回りがゆっくりに見える俗にいうゾーンに入った事を思い出したのだ。

その時のことを思い出してみたらなんと成長したのだ！そんな感じで右手に意識を集中して木を殴ったら真つ二つに折れた。

調子に乗った俺は璃正さんから学んだ八極拳と気を同時使用して木を殴ってみたら粉碎した。

更に気を良くして岩を殴ってみようと思っただけでやってみたら弾けた・・・うん言い方が悪かった、漫画みたいに岩が砕けた。

更により良くするために、人体を一つの地球に見立て、体にある気の流れを地脈のように考えることで大きな流れから少しだけ力を借りる、と言う使い方に辿り着いた。そして気付いたのだがグツバイ常人の俺、ハロー人外の俺。って事になっていた。

そんなことを思い返して凹む俺を知らんと言わんばかりに「ということ、使ってみてくれ」と黒鍵を押し付けてくるマスター・・・受け取って、集中して気を込める。

全く持つてどんな機能がどうなっているのか分からないが、確かに刃は飛び出した。しかし、マスターが出した両刃ではなく片刃・・・

「なあマスター。これは、剣に対するイメージで変わる物なのか？」

「ふむ、興味深いな」

「・・・どうやら少し研究が必要みたいだな、マスター」

「ああ。どうやら私は、思っていたより研究者と言うモノに向いているのかもしれん」

「興味を持って、知ろうとして行動すればそいつは既に研究者だ」

「良い言葉だな。誰の名言だ？」

「俺だ」

「・・・お前だったのか」

「俺がやった事を知った小学校の孫がその校長と交渉したらしくてな、ドヤ顔で語ってやったのさ」

「裏方なのではなかったのか？」

「裏方なのはこの肉体年齢の頃だ。夢で見ただろ？その時の話だ」

「ああ、なるほど。あのことが・・・そんなに有名なのか？」

「俺じゃなくて東さんの方がね。俺は彼女に劣る技術者で、彼女と一時期一緒に行動してたからそのこともな。あとは、技術的にも色々してたし」

「ふむ、その後の夢を見てみたいものだ」

「俺としてはあんまり見られたくないんだけどなあ」

「まあそう言うな、余計に見たくなってしまう」

・・・あれ、もうこの子愉悦ってね？

コートの内側に複数の黒鍵の柄を仕込み、夜の新都。冬木ハイアットホテルの近くにある建設途中で鉄骨むき出しの建物。

「・・・高いな」

「そら、三十七階建ての屋上だからな。ここからならあっちの屋上に飛び移るのも楽だし、他に自由な建物も無かったしな」

「・・・アサシンとは一体何なのだ」

「それ、忍者に忍者って何？って聞くのと同じだぜ？」

「つまり、代行者に代行者とは何だと聞くような物、か」

「結局の所、言い始めた本人しか分からないんだなあこれが」

「哲学的だな」

「哲学とは一体・・・」

「この問答はもうよそう。そろそろ行うとしよう」

「いや待った、なんかヤバい」

「ヤバい？」

「とても危ない状況って事」

俺の英雄としてのスキルには直感なるものは無いんだが、今ホテルに向かうのはヤバいと言い切れる。東さんが訪問してきた後の千冬さん並にヤバい。

全力で警戒してステルス機能を排除して速度に特化させたフロートカメラを数機、拡張領域から放出した直後にビルが爆音を響かせて倒壊し始めた。

「マスターー」ってドラマのワンシーン見たく叫びながら振り向いたら既にマスターがいなかった件について。うわっ・・・ウチのマスター、優秀過ぎっ!?

とかやってる間にフロートカメラが何かを見つけたのか空中モニターを二つ表示してきた。

一つはマスターと俺が港のコンテナの上で遭遇した女の人と向き合っているシーン。

一つは、衛宮さんが走っているシーン。

「よし、衛宮さんにちよっかい出しに行こう」

内容は、そうだな・・・この間あの女の人を何故守ったのか、って点だなー。

追ってる最中に衛宮さんが何かを投げたと思ったら数秒し、マスターからパスでの連絡で「逃げられた」と連絡が来た。戦争ガチ勢ってヤバイ、そう思った。

まあ、今日はプレッシャーを与えられたらいいなあって理由でこのまま追い続けるんですけどね。

とか思ってたら街中で怪しく紫色に光るバングルを付けた青年が子供の手を引いて歩いているのを見かけてしまった。

リングが俺の脳内に直接警報を上げるもんだから衛宮さんよりもその青年をターゲットにして尾行することにした。

全力で息をひそめ、とあるゲームをやっていた時に束さんが「あ、これ作れる」とか言って作ったステルス迷彩のスイッチを入れ、青年が入って行った建物について入っていき、いつか見た光景を見た。

正気を失っている目をした少年少女等・・・何度見ても吐き気がする光景だ。状況は、俺が暗躍していた時と何も変わらないだろう、あの青年が最近噂の殺人鬼ならこの子達が待つ未来はどっちにしろ同じだ。

とりあえず青年は青年で楽しそうに「ここで待っててねー」なんて言って甲に赤い痣のある手で少年の頭を一撫でしてからどっか行つたし・・・全力で殺しとくか。いや、今は下準備の段階だ。とりあえずそつと子供達の服のポケットに発信器をいくつか入れておいて様子見をしよう。

とか決意した矢先、マスターからの連絡が入った。

キョロキョロとあたりを見回し、青年が建物から出て行ったことを再確認してから口を開いた。

『アサシン』

「ああマスター、どうかしたん？（こいつ、頭の中に直接・・・!）」
『どこにいる』

「多分最近噂の殺人鬼の餌場」

『・・・餌場?』

「子供を魔術を使って攫つて一か所に集めてるんだわ。建物の大きさからいって多分そろそろ子供を移すんだろう・・・しばらくここで張ってる」

『すぐに殺すのはどうだ』

「多分あいつマスター。手の甲に赤い痣確認したし、下手に殺してサーヴァントが単独行動スキルあつても困る」

『それに、残っているサーヴァントはキャスター。拠点となる工房を地脈の上に経てれば単独行動スキルがなくとも少しは持つ、か。よし、サーヴァントを確認し、情報を回せ』

「任せろ。じゃあこつちから連絡するまで待っててくれ」

パスでの通信を切り、手早く発信器を子供達に取り付け、霊体化する。

少しして戻ってきた青年は新しい子供を連れてきており、建物の奥にある扉を何個もくぐり、床下収納の様な扉を開き、地下へ子供たちを連れて入って行った。

ステルスフロート機を先に追わせ、少し間を開けてから俺も降りていく。

辿り付いたのはちよつとした重機なら通れそうな程の大きく丸い

下水道：・ステルスフロート機から送られる信号を辿っていくと、何十個もの柱が巨大な空間の天井を支える様に建っていた。これはどちらかと言うと下水道じゃなくて地下貯水池みたいな所だな。中学の時授業で習った、都市には大雨や台風の時に備えて地下に巨大な空洞を作り、そこに雨水を流すと。

頭の中でそんな雑学を思い出していると話し声が聞こえてくるのでこちらへと向かいつつボイスレコーダーのスイッチを入れておく。

「青髭の旦那ー、結構連れてきたけど、どう？」

「ええ、よくやりましたね龍之介。ご苦労様です、少し休んでおきなさい」

「えー、俺もやりたいんだけど」

「続けての作業はクオリティの低下につながるのですよ龍之介。少し休みなさい」

「分かったよ。旦那もすっかり休むんだよ？」

「私はサーヴァントですので、休憩はいららないのですよ」

「えー！旦那ズツリーー！」

・・・欲を言えば子供達を助けたいんだが、確実に殺す準備も、相手の情報も全くない今の状況じゃ逃げられても厄介なことになり兼ねないので場所をしっかりとマーキングしてから帰還する。

元々十を救える一夏君みたいな正義の味方でも。一を捨てて九を助けられる弟子にした子の様な現状に嘆く様な男でもないしなあ。

俺は八を切り捨てて二を助ける程度の力しかないんだし・・・まったく、世知辛い世の中だ。

原作的愉悦セミナーですよ

時臣氏がインスタント食品にはまったり、ランサーのマスター特定したり、ホテルに侵入したり、マッピングしたり、黒鍵なる武器を支給されたり、ホテルを眺めてたら倒壊したり、マスターがどつか行ったり、敵マスターを追っかけていたら別のマスターを見つけたり、子供たちが誘拐されている現状を発見したり、鍛えた末に気を少し使える様になつたりしてたりと、なんかあちこち動いてる鷲津です。

戻ってきてすぐにあちこちのデータを漁りまくり、あの青年の情報を調べ上げる。とある学校の卒業生データバンクから顔写真と呼ばれていた名前を、あちこちのコンビニのバイト名簿から同姓同名の人物のデータを発掘できたのでフリーターなのだろう。とあたりを付けた所で自前のポンコツ脳みそから前世の人知識がこの人物の詳細を教えてくれた。

どうやらそういうサイコ野郎な模様。

その相方でありサーヴァントである青髭の旦那と呼ばれていたのは、かの聖女ジャンヌ・ダルクを支えていた騎士の一人であり、彼女が処刑されて以降狂ってしまった男、ジル・ド・レエ……。「あーくそ、胸糞悪くなる光景だったわ」

殺処分と言った感じで子供が殺されている光景は生憎と見慣れてしまったが、帰投する際にチラツツと見えてしまった主成分：人間の現代アートには吐き気しか覚えなかった。少し茶化して言わなきや怒りを抑えられないほどだ。

「死体を見たことが無かったのか？」

「違う。だが、俺の見たことのある死体は人の死に方をした。だがあれは人の殺され方じゃない……ステルスフロートのカメラは置いて来た。なんなら見るか？俺は嫌だがな」

「一応見させてもらう」

「じゃあその間に俺は時臣氏に連絡してくる。生中継で見てみな」

貯水池に置いて来たステルスフロート機に繋いだ空中モニターを放置して情報を纏めながら時臣氏の書斎に向かう。

一通り仕入れた情報を時臣氏に空中モニターでプレゼンし、顎に手を当てて情報の吟味している時臣氏が口を開いた。

「アサシン、頼んでもいいか」

「暗殺ですか？」

「ああ。表向きには今宵璃正氏に全マスターに向けてキャスター討伐を依頼して貰うつもりだ」

「となると結局、俺は誰だ？ ってことになるんですけどねえ」

「無関係の人間、を装ってくれると助かる」

「出来るんで何も言わないことにします」

「・・・出来るのか」

「知ってて言ってるのかと・・・それじゃなかったらただの馬鹿ですよ時臣さん、マスターはサーヴァントのステータス見れるんですからね」

「気配遮断があるだろう？」

「見つかったらバレるってこと忘れてません？」

「・・・とにかく、頼むぞアサシン」

「仕事はしますよ、仕事は」

優雅さんマジポンコツ。普通のサーヴァントからしたらどんな無茶ぶりか本当に理解できてるんですかねえ・・・

まあやってやれないことはないんでやりますけれども。

「ところでアサシン、綺礼から聞いたのだが・・・なんでも、世界を救ったとか」

「生きてた時からそうなんだけど、皆なんかやけに持ち上げたがるよね」

「当然だろう、世界を救ったのだから」

「俺が世界を救ったって話が公になった時、信じたのは少数どころか知り合い以外は居なかった。でも、当時超有名な人が証言してある程度は認められたんだ。その時に一部がとても面白い事を言って来たんだが、聞いてみたいか？」

「ふむ、興味があるね。なんと？」

「そのとある有名な人の信者みたいな連中が『その人の手柄を横取りしたクズ男』ってな。その人は否定してくれてたが、世界の三分の一くらいがそんな言い分に賛同して、否定してるやつ、信じる奴、どうでもいい奴の三つに綺麗に分かれてね。いやー、割と真面目に救わなきゃよかつたって思ったよ」

「人とは度し難い存在でもあるからね」

「まあ正直そんな連中が生きていようが死んでいようが関係ないんですけどね。俺に直接関わってこない限り」

「確かに、関わるだけでこちらに害がある人間は多いものだからね」

「でも実際の所、有能な敵よりも無能な味方の方が厄介だったりするんですけどねー」

何がって？一夏君と一時期、実験施設手前まで来て行動理念で揉めて殺し合い一歩手前まで行って千冬さんに止められて大分離縁してたからな・・・その隙について外道研究者逃げられるし、実験に使われた子供達も・・・思い出したらイライラしてきた、マスターの所行って酒飲もう、そうしよう。

とか思ってたすぐにマスターの部屋に来ただけど・・・なんというか、空気がヤバいです。

「道化よ。貴様はあの男をどう思う」

「・・・アサシン、お前の意見を聞かせてくれ」

え・・・なにこれは・・・？

「どういう言う状況？」

「こやつを勧誘している所だ」

「ギルガメッシュ王に妙な事を吹き込まれていた所だ」

「で、なんで俺に・・・誰のこと聞いたん？」

「時臣だ」

「あー、マスターがやれってんならやるぜ？はたから見てたら面白いんだけど関わるとちよつと面倒だ」

「そのやり方に、少し趣向を凝らす」

「王様が？なんか妙な事企んでるよな絶対」

「妙な事とは随分な物言いだな、この王たる我に向かって」
「胸張って否定できるか？」

「王たる我のやることは全て正義なのだ！」

「胸張って開き直っちゃったよこの王様……」

「アサシン、茶番はやめてくれないか」

「いや、結構ガチな奴なんだけど」

「我は何時でも本気だ！」

「マスター、この王様になんか言われても気にしない方向で」

「……そうだな、もう気にしないことにする」

「まあそういうな綺礼。これは自己啓発セミナーと言う奴だ」

「どっから仕入れてきたその情報」

「どこぞの神を信仰する有象無象がのたまっておったぞ。全く、折角

この我がいるというのだ、我を崇めればよいものを」

「王様崇めるくらいなら天皇崇めるわ」

「天皇……確か、この国の王。であつたな」

「喧嘩は売っちゃだめだからねー」

「驚津……貴様は我を何だと思っておるのだ」

「行動力があつて実力もある。でも何するか分からない馬鹿」

「貴様……」

「ギルガメツシュ王、貴方の前にいるのは何をするか分からない阿呆
です。あまり気になさらぬように」

「まあよい、許す。王は寛大だからな」

「……どこまで堪えんのか試してみてえ……」

「やめておけアサシン。それより、何故ここに？」

「イラついたから酒でも飲もうかなって……ああそうそう、時臣氏が
呼んでた」

書斎から出る直前に言われてたことを今思い出した……まったく
もう俺って奴は。

「ついでに璃正さんの事も呼んでたぞ」

「む、そうか。伝達ご苦労」

「さつきまで忘れてたんだけどな」

「素直なのは良い事だ、とだけ言っておこう」

「子供じゃねーんだから。まあ行ってらっしゃい」

ワイングラス片手にマスターを適当に見送り・・・問題は王様なんだよなあ。どうすりゃいいんだろうなあこいつ。

「で、なんでマスターを勧誘なんて?」

「ふっ、決まっておろう。愉快そうだからだ」

「やっぱこの王様駄目だね。謀反起こすわ」

「良い、許す。時臣を殺して来い」

「で、実際の所どうなの?ウチのマスター?」

「自らの欲情を理解できていない・・・いや、理解したくないのである」

「あー、そりゃ辛い」

「そしてその抑えてきた反動で必ずや愉快なことになるであろう」

「嫌な予感しかないなあ・・・で、どうするよ」

「ふむ、まずは奴の欲求を知ることから始めようではないか」

「あ、分かってないのに言ってたのね」

「王たる者、民の事など一目見れば分かるわ」

「王様ってスゲー」

「他の有象無象の自称王共等とは違うからな」

「それも十分おかしいと思うんですけど」

「ふん、貴様の矮小な常識程度でこの王たる我を理解できるとでも思っているのか」

「なんか王様最近トゲないか?」

「それを貴様が言うか」

「・・・え?俺なんかした?」

「近頃慣れ慣れしいぞ」

「あ、あー・・・正直めんどくなくなった。ぶっちゃけ今もメンドイ」

「随分とはつきりと物を言うな、貴様」

「しっかりと言わなきゃ伝わんないしな。だから俺は仕事をすることにした。計画は勝手にやってくれ、適当に妨害するから」

「よろしい。貴様が妨害をしてくるといふのならば全力で迎え撃とう」

！」

「なんでそんなに全力なんですかねえこの人は・・・」

「民の戯れに付き合うのも王の役目！」

「やだ・・・なにこの王様、俺の知ってる王様じゃない・・・」

「つまらなければ死刑」

「最悪だこの王様！」

「我は何をしても許される・・・何故なら！王なのだから！」

「もうマジでキャラ崩壊してんよこの人」

高笑いして机に片足乗せてワイン飲んでるカーニバル化した王様は放置して少し休憩することにした、もう関わってらんないよ。

璃正さんがお駄賃をくれたのでジャージに身を包み、新都のゲーゼンで楽しむ。

楽しみながらも、俺は前世の人の知識を更に深く回収していた。リングが適当にサルベージしてくるのは良くあるが、こうして自分から探すの思えば初めてかもしれない。

探す内容は勿論あのクソつたれ共について。あいつ等にはさっさとご退場を願いたいんだけど、それによっておこる弊害というモノを考えようと思う。

一つ。キャスターがアインツベルン城に向かい、カオスな戦線が繰り広げられる。

二つ。ライダーのマスターの成長フラグ。

三つ。凜嬢の冒険と、バーサーカーのマスターが葵さんに向けて聖杯戦争参加してます宣言。

四つ。川で怪獣vs英雄、無差別対戦。

二番目と三番目の順番があやふやだが、まあ一番目と四番目の間だということとは確証出来る。

それと、ちよつとだけやってみたい事が有ったりする。

サーヴァントの宝具って、奪って殺したら俺の物になるのかなあ・・・魔力循環システムの魔道書。魔力が欲しいお、でもやっぱりそういうスキルがいるのか・・・分からないから試してみよう！

筐体から離れ、ぶっ通しだった目を少し休ませるためにゲーセンを出た所で、俺は自分の目を疑った。

赤い短髪と輪郭を覆うような赤い短い髭を生やした巨漢。あの日俺を轢いたライダーが、胸の所に世界地図の上にゲームタイトルが書かれたパツツンパツツンの半そでTシャツを誇らしげに來ていたのだ・・・外人のセンスは分からねえわ・・・

「む？おお、もしやそこのお主。あの時のか!？」

「・・・なんで分かるんですかねえ」

「勘だ」

「王様ってスゲー」

顔隠してたはずなんだけど分かるのか・・・昔の人間ってやっぱバケモンだわ。

「して、お主は何故ここに？」

「いや、それこっちのセリフなんだけど」

「うむ、セイバーを見て思いついたのだ。当代風の衣装を着れば実体化して街を楽しめるのではないかとな！」

「あー、王様天才だわ。超天才」

「そうであろうそうであろう！して、お主は何故？」

「この時代の娯楽施設にな。今はその休憩がてら出てきた所」

「ふむ、この煩い場所がか？」

「娯楽って言っても多分王様が考えてる様な物じゃないぞ」

「当代風の遊具があるのだろうか？よし、案内せよ！」

「オーケー、じゃあついてきな王様」

征服王 いすかんだる が 仲間になった ！

「ふむ、これはなんだ？」

「パンチングマシン。殴ってその威力の測定してくれたりする・・・まあゲームだからそんなマジな測定はされないけど。ってこれマックス3000か」

「ではやろうではないか！どうせだ、力比べをしようではないか」

「ガチマッチョと俺みたいのじゃ結果は見えてるんだよなあ」

結果。王様250。俺、300。勿論八極拳使いました。結果は見

えてるんだよなあ（ドヤア）

「これはなんだ！」

「テトリスじゃねーか！なんでこれチョイスした！」

「他の者がやっていてな、これならば余でも出来そうではないかとな」

「あー、じゃあじつくり見ててな。意外と奥が深いから」

「ふむ、そうだな・・・ぬおっ！今のはなんだ！」

「Tスピんだな。回転させて捻じ込むスキルだ。まあ法則性が決まってるから無理に入れようとしても入らなかつたりするんだけどな」

「おお！全て消えたぞ！」

「王様の歓声にプレイに応えてくれてんだよ。楽しんで見てな。終わったら賞賛してみな」

「むう、この世では褒美を取らせられないではないか」

「今の世の中はその気持ちだけで十分な世の中だ」

「そうなのか？世界も随分と変わったものだな・・・」

「何千年前だよ」

結果。前のプレイヤーさんにテクニックを教わった王様はみるみる腕を上げた。

と言うかハマったみたいなので「携帯ゲームでテトリス出来るよ」と教えてみた。

「この時代は素晴らしいな！娯楽に満ち溢れておる！」

「まあ、この時代に生まれた連中からしたら新鮮味なんて欠片もないんだけどな」

「そうなのか？ふむ、実に勿体ないものだな。こんなにも愉快だといふのに」

「そんなもんさ。さて、俺はそろそろ帰るわ」

「うむ、大義であった！」

そんなこんなで何故か仲良くなったライダーを見送りつつ、ステルスフロート機をサプライズでプレゼントしてあげた。王様は油断してるくらいでいいんだろうけど、それは国にいるときだけにしておけよ？寝首搔いちまうぜ？

原作的森内戦闘ですよ

とある事情で激おこ寸前だったり、時臣氏に無茶振りされたり、王様とマスターが面倒なことになってたり、ゲーセン行ったら征服王ことライダーと仲良くなったり・・・ちよつと意味が分からない驚津です。

さて、今頃璃正さんが演説し終わって各々色々と考えている所だろう。

と、俺は自転車を漕いで国道のガードレールを飛び越え、城へと森の中をサイクリングしていた。

マスターもこの森の中に入ってなんかやるって言ってたし一応気にしておこう。

「思えば、森の中を自転車で、なんてしたことなかったなあ」

時々木の根や石に乗り上げて少し飛んだりスリリングなサイクリングを楽しみつつ・・・銃声が響きバランスが崩れ、ハンドルを戻そうとすれどもタイヤがおかしくなっているのだろう。

と言うわけで全力で自転車から飛び降りる。

「あ、相棒！なんて姿になって逝っちまったんだ・・・これは随分な歓迎じゃないか。あの時のおねーちゃん？」

ズタボロになってしまった拾ったママチャリを看取っている俺に向けて港のコンテナの上で後ろから話しかけたあの人が拳銃を両手で構え殺す気満々でこちらに向けているわけだ。

さて、どう言い訳したのか・・・マジでどうしよう・・・

「貴方は、何者ですか」

「なんだかんだと聞かれたら、答えてあげるが世の情け！」

「ふざけてこちらのやる気を削ぐ作戦ですか」

「いや、素なただけど」

だから無言で発砲するのはやめてくれませんかね！

「で、何の用ですか」

「このねーちゃん何事もなかったかのように進めやがった・・・こえー、マジこえー」

「もう一度撃ちますよ?」

「オーケーオーケー、キャスターの討伐のお手伝いさ」

「何者なのですか」

「何者かって言われちゃったら・・・まあアサシンだけど」

「・・・やはり切嗣の言っていたことは正しかったのですか」

「あー、うん。一つだけ訂正させてくれ。俺は二体目のアサシンだ」

「二体目?」

「聖杯が教えてくれたんだが、聖杯を欲する人間ってのは存外多いらしい。で、俺のマスターが欲しているのは根源ってのだ。それ以外はどうでもいいと言わんばかり。だから、協力はするし、報酬の令呪もそちらにやろう・・・って話」

「信じられるとでも?」

「信じて貰えないなら俺は協力もしないし、味方にもならない。まあマスターに連絡を願いたいんだが」

「その場で、両手を上げて待っていなさい」

両手を上げてお手上げポーズ。目の前の彼女は無線で誰かと通話中。盗聴も出来るんだけど信用下がりそうだからやめておく。

しかし、咄嗟の嘘も何とかなった・・・のか?まあでもいい嘘ではあったと思う。ウチのマスターが無関係と思わせることも出来るし、架空の敵を作れた。故に、あの遠坂邸での出来事は茶番ではなくガチの作戦ミスだった、と思わせる事が出来るのだ!

我ながら頭を抱えなくなるような幼稚な作戦だが、シンプルな作戦の方がよかったことは何度もあるので何とも言えない気持ちだ。作戦成功も五分五分だろうし・・・

「・・・キャスターが森の中にて発見されたそうです」

「信用は実力で掴み取れって?いいね、好きよそういうの」

「貴方の好みはどうでもいいです」

「ヒヤッハー!キャスター狩りだー!」

キャスターを追っていたステルスフロートの反応に向けて一直線に走る。木とか知らねえよじ登るぜヒヤッハー!森は俺のグラウンドだ!

走りに走った末、子供の頭を鷲掴みにしているキャスターを見かけたのでついその横つ面にドロップキックをかましてみた。

叫び声を上げながら吹っ飛んでいくキャスターと、阿鼻叫喚の相を挺しているが・・・よろしい、ならばこうしよう！

「英雄戦隊！アサシンホワイト！不忍に、今見参！」

よく孫達とごっこ遊びで遊んだよなあ・・・今そんな状況じゃないのは分かっているけどこのノリが意外と大事だったりする。海外の組織潰しに行った時はこれで現地の子供達を味方につける所から始めたりする。

「さあ青少年少女達！この英雄戦隊の一人が来たからにはもう安心だ。怪人海鮮物呼び出しおじさんなんかメジヤないぜ！」

散り散りになりかけていた子供達が泣きそうな顔から来た、メイン盾来た！これで勝つる！みたいな顔になった。

「おのれ・・・おのうれアサシン如きが！この私の贄を奪うなどとッ！」「黙れバットエンド症候群の手先め！貴様がやりたい事など、俺にはお見通しだぞ！」

拡張領域から地雷の様な平たい円柱を取り出し地面に設置して中心にあるボタンを押す。地雷的な何かを中心に半径五メートルほどの半透明の半球体が俺と子供達を覆う。勿論シールドエネルギーで作ったドームだ、

「っ、結界だとお！しかし、ならばその結界を削り取るまでです！」

キャスターが手に持つてる本を開いてドヤア！つてしてるけど、ワイヤーガンを取り出して本に向けて射出。綺麗に本に引っかけり、ワイヤーを巻き取るトリガーを引けばあら不思議。

「おっ、おのれアサシイイイ！」

本を掴んだままのキャスターが引きずられてこっちに来た・・・どうしてこうなった！

こっちに近づいてくる魚面のおっさんがあまりにも気持ちが悪いものだからついシールドエネルギーから出て顔面を蹴り飛ばしてしまった。

「くっそ、アレ奪えたら楽になるんだろうけどなー」

「くっ、その様に簡単にこの私の螺旋城教本を奪えるとしてもお思いでしたか!」

「あわよくば奪いたかったのが二割と、ちよつと実験してみたいって欲望が八割」

「ほぼ欲望ですねえ、いいですね。貴方、もしや私の同志なのでは?」
「少なくともあんたみたいな外道ではないって自負はしてるから同志でも同類でもないわ!」

リングが子供の体内から奇妙な魔力反応を感知したと連絡をしてきたので一番近い場所にいた少女に気を込めて添える様な弱さで腹パンをする。

少女が口を両手で押さえるが、助長するように背中を擦ると口からグロテスクな紺色の卵の様な物が出てきたのでそれを掴んでシールドエネルギーの外に投げる。

シールドを超えて地面に落ちた卵の殻が途端にはじけ飛び中からヒトデを巨大化させ、陸上生物にして何百倍も殺意の塊にした様な新種の生物が現れた・・・どうすんだよ、子供泣いちゃったじゃないか。

「他の子達もだ!大丈夫だぞ皆、今すぐ吐き出させてあげるからなー!」

そう言つて一人一人腹パンして回り、吐き出した卵をひたすら外へと投げて行く。最後だけちよつとどうやって子供の中に入つてたんだ?つてくらい大きいヒトデが出てきたが蹴り飛ばしておいた。

「まずはその小憎たらしい結界から削り取らせていただきますよ!ふんぐるいむぐるうなふ。さあお行きなさい海魔達よ!」

キヤスターが本を開き、聞き取りづらい言葉を呟いた直後に周りから現れたグロヒトデがうねうねと蠢きながらシールドエネルギーにビタツと張り付いて・・・

咄嗟に呟いた「はいい皆、これが邪悪な水族館だよー」という俺の呟きに「こんなのすいぞくかんじやないよー!」と子供達が返してくれた。うん、いい子達だ。

さて、問題はここからだ。この子供達に少し手伝って貰うか、どうするか・・・よし決めた。

「いいか少年少女達、これを見てくれ！」

そう言つて取り出したのはまさにガンコン。しかし銃口をグロヒトデに向けて引き金を引くと赤いビームが飛び出しグロヒトデの体に穴を開けた。貫かれたグロヒトデは霧散したんですが何これ怖い。「良くわかつたかい、これはとても危険な武器だ。今から君たちにこれを渡す。弾がなくなつたら言つてくれ・・・いいかい？絶対にあのヒトデ以外に向けられないようにね？ああでも、あの怪人海鮮物呼び出しおじさんには向けていいよ」

と言つた直後、子供達が一斉にキャスターに向けて発砲した・・・何この子ら怖い。

「純粹無垢な子供達に私を攻撃させるなど、おのれアサシン！」

「生憎生まれた時代と国が違いすぎる。日本の子供が残酷だぞ！」

俺もビームライフルを取り出してその辺のグロヒトデを撃つていく。

「キャスター！それにアサ・・・シン・・・？」

「せ、セイバールブルー！来てくれたのか！」

「初対面の相手に何を言っているのだ貴様は！」

「子供達を少しでも安心させるための方便だ！」

「くっ、子供を盾にするか！」

「お前は一体何と戦ってるんだ！」

プライドか？プライドなのか？

「おおジャンヌウ！ようやく来てくださいましたか。さあ共にその暗殺者を葬りましょうぞ！」

「何を勘違いしているキャスター。私はお前を討ちにやってきたのだ！」

「そうですか。では私が貴方を取り戻して見せましょう！聖なる乙女よッ！」

なんか白熱してるけどこっちは子供達が「ねー切れたー」と煩いのでのんびり観戦している暇もなくなってしまった。はいはい新しい銃だよ・・・だから銃を受け取って真っ先にキャスターに向けて撃つのはやめなさい。

「無様だぞセイバー。もっと魅せ付けるような剣でなければ騎士王の名が泣くではないか」

「ランサー！なぜ、どうして！」

「ランサーグリーン！まさかお前まで来るとはな！」

「ら、ランサー、ぐりーん？」

俺の呼びかけに困惑しているランサーと、俺の周りで「グリーン！」「じみなグリーン！」「ぶきはやり！」「・・・じみだね」「うん、じみだね」と精神攻撃を仕掛ける子供達。そしてその声を聴いてさらに「じ、地味・・・」と凹むランサー。英雄メンタル脆いなオイ。

「おのれ貴様等！誰の赦しを得てこの私を邪魔するか！」

「そう言う貴様こそ誰の赦しを得ての狼藉か！このセイバーの首級は我が槍の勲。他者の獲物を横合いから搔つ攫おう等と、戦場の礼を弁えぬ盗人の所業だぞ！」

「戯け！私の祈りが！私の渴望が！私の聖杯が彼女を蘇らせたのだ！彼女はこの私の物だ！血肉の一滴、一欠片まですべからく！その魂さえも！！」

「くたばれ狂信者ファツキュー」

なんか叫んでる所申し訳ないんだけど、その本持つてる腕に向けてビームライフルでシュー！超！エキサイティン！

「おのれおのれおのれ！騎士の後ろからしか何も出来ぬ暗殺者風情が！」

「役割分担だ。俺が出来ないことは出来る奴がやればいい。他の奴が出来ない事を、俺がやるだけだ！」

ワイヤーガンを地面に落ちてバウンドしている本に向けて発射し、ワイヤーがしっかりと本に巻き付いた事を確認してワイヤーを巻き取る。

「おうサーヴァントならサーヴァントらしく剣で戦ってみろよ。なんなら剣、貸してやろうか？」

「私の螺湮城教本を・・・しかし、その本を貴方が読めるとはとてもではありませんが思えません」

「それはどうかかな」

と言えるデユエル哲学。

俺は手札から「リングの知識」を発動！この効果によって俺は見覚えの無い言語も文字も理解できる！つまり原作ラーさんを召喚することができるのだ！・・・悪乗りはもうやめておこう。

しかし、適当に開いた本。もとい魔道書を読めるのは事実。

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うが」

・・・何やらSAN値の下がりそうな代物だけど俺の精神は異常なし。少し覚悟して読み上げたつもりなんだけど、どうやらリングが精神防壁みたいなのをしてくれているらしい。リングさん有能。

とかやっているとグロヒトデ達がキャスターに襲い掛かっていた。悲鳴とか肉を食いちぎる音とか聞こえて・・・子供達を見たら吐いた。

「あ、あー・・・まあそうなるよね」

「そうなるよね。じゃない！アサシン、貴様と言う奴は！」

「仕方ないじゃないか、だってアサシンだもの」

「・・・しかし、褒められた行動ではないが、称賛に値する行動ではある。何故なら次にセイバーと戦う機会を作ってくれたからだ」

「ランサー、貴様はいいのだろうが・・・」

「アサシン知ってるよ。騎士って実はえげつないって」

剣が痛い↓じゃあ防具を発展させてみよう↓西洋甲冑が流行る↓剣が通らねえ↓じゃあ剣じゃない武器作ろうぜ↓メイスの完成。ほら、えげつない。

と言うよりも、食べ終わったのか空気に霧散していくようにグロヒトデ達が消えて行く。と言うか魔道書、俺の手に残ってるんだけど大丈夫なのこれ？

危険は俺の手元にあるということで、安全を確認したので子供達からビームガンとシールドエネルギー地雷を回収、リングを使って少女達からこれまでの記憶を抹消し、とりあえず俺の言う事を従う様に催眠紛いな事をする。

「じゃあ俺はこの子ら家に送迎してくるわ」

「ま、任せても大丈夫なのか」

「む、何やら我が主が危機の様だ。どうやら俺を連れずに本丸へ乗り込んだようだ」

「おそらく私のマスターの仕業だろう。ランサー、急ぐがいい。騎士として主の危機に馳せ参ずるのだ」

「忝い、セイバー」

「我らは互いに騎士としての決闘を望んだ身。共にその誇り、貫こうぞ」

あ、ランサーが消えた。

「所でだセイバー。この森、俺達以外に誰かいるぞ」

「なに？ソレは本当か」

「森は俺のホームグラウンド。森の気が騒いでいる・・・どこかで戦っているようだ」

うん、木々がザワザワしてる。「やっべ、次折られるの・・・俺じゃね？」って感じにザワザワしてる。あれ、俺マジで人間やめてね？

「そうか。私は其方へ向かう。アサシン、貴公は・・・子供達を任せるぞ」

「任された。安心して行ってらっしゃい」

そして森の中へと消えて行くセイバーを見送り、子供たちを引率して森を抜け街へと向かった。

ごめんなマスター、一応連絡送っておくからセイバーから逃げ出してねー。さーて俺はこの魔道書を読み歩きしよっと。

原作的遠坂凜の冒険

森の中をサイクリングしていたら銃撃されたり、嘔吐してみたり、森を走ったり、アサシンホワイトだったり、子供達が殺意の塊だったり、セイバーブルーだったりランサーグリーンだったり、ビームライフル撃って魔道書奪取したり、ヒトデが逆襲したり、ランサーのマスターがピンチだったり、森が騒がしかったり、無事子供達を家に送り返した驚津です。

まさか子供を家に戻すためにサンタ行為をすることになるなんてな。このアサシンの目を持ってしても見抜けんかった・・・

しかし、あの青年・・・キャスターのマスターと思しき誘拐犯&快樂殺人犯君はどうしてくれよう。

さっさと処すか？こういう表に出しちゃいけない事件の対応は確かに俺の役割だけど、殺傷した数も数えきれないくらいだけど、うーん、どうすんべ。

さくつとやるのもいいけど趣向を凝らしてる相手だからこつちも趣向を凝らしてみようか。そうだな・・・ピタゴラスイッチとかどうだろう。

「って感じの事を計画してるんだけどどう思う？」

「うむ、良いのではないか？綺礼にはパスを通じて見せられるのだろう？」

「準備から完成までライブ放送してやんよ」

「して、なにやら宝具を奪ったようだな」

「これもやらんぞ、俺はこれで実験するんだ！」

「一体何を行うつもりだ」

「魔力を動力にするなんかを作る。何がいいかな？」

「この我にアイデアを提供させるとは、大きく出たな道化よ」

「いやだって、俺の脳だけじゃ発想に限界あるし」

「ふむ・・・よろしい、この間雑種共が作ったテレビというモノを見ていたのだが、その中で鉄の巨人が有象無象を蹴散らしておったのだ。

その昔出会った巨人を思い出してな、作ってみせよ」

「魔道書が動力の巨大ロボット・・・アカン」

「何がダメなのだ？この我にアイディアを求めたのは貴様だぞ、作ってみせよ」

「ぐぬぬ、よかろう！俺はこれから宇宙の真理に触れるぞっ！」

そして俺は遠坂邸を飛び出し廃材置き場へと走って行った。

スクラップ共をビフォーアフターしてやんよ！

「ギルえもくん、やっぱりスクラップじゃ無理だったよ」

数分後、遠坂邸には汚れきった姿で倒れ伏す俺の姿がッ！

「・・・何をしておったのだ貴様は」

「スクラップ解体してロボ作ろうとしたけど部品が足りなかったよー」

「ほう？して、どこまで作り上げたのだ？」

「動力部。手で触れずに自動で魔道書から魔力をくみ上げる装置」

「それだけで十分な働きであるぞ。褒美だ、この我の蔵を少しだけ使うことを許そう」

「・・・蔵で何ができるの？」

「この世に生まれる人の手で作れる鉄の巨人。その部品を我の蔵に入れることで名実共に真の原典とし、ただの動く鉄塊から鉄の巨人の逸話へと昇華させるのだ！」

「わーい、言ってる意味は良く分からないけど王様太っ腹！」

「そうだ、もっと我を褒めよ。讚えよ！崇めよ!!」

「ヒヤッハー！英雄王様最高ー！」

数十分後にマスターがやってきて「一体何なのだこれは」って言うまでその奇妙な光景は続くことになった。

「マスターマスター、ちよっと口座作ってよ」

「何故だ？」

「作りたい物があるんだけどかなり金が必要なんだ。だから株がしたいんだよね」

「・・・株？」

「道化よ、この我の財宝を使えばはした金なぞあつと言う間に集まる

ぞ」

「いや、王様の財宝マジで一国買える値段があるからちよつとそれはマズいかと」

「ふむ・・・ならばこの現代に手軽に金を稼ぐ方法は無いのか」

「賭けになるんだけど、馬を競わせる競馬つてのがある。当たればマジで一攫千金」

「万馬券、というモノだな。なかなか当たらないと懺悔に来た老人が嘆いていたことがある」

「では行こうではないか。その競馬とやらに！」

「だがギルガメツシユ、冬木の地から離れられないのだろうか？」

「ならマスター、行つて買ってきて」

「・・・運は良くないぞ」

「安心せよ綺礼、私の言う馬を買えばいくらでも金は集まるぞ」

「・・・そういえばギルガメツシユには黄金律というスキルがあったな」

「何それホワイ？」

「何もせずとも金がやってくるスキル・・・実にふざけているが、これにあやかればあるいは」

「マジかよ王様ハンパじゃねえな！」

「王たる者金は稼ぐ物ではなく貢がせるものなのだよ」

「はえくすつごい王様」

「と言うわけだ、連絡手段と近場の競馬を何とかせよ」

「もう出来てる。明後日隣の県で結構大きめのあるらしい。とりあえずマスターはインカム渡すから耳に付けといて」

「では、競馬新聞を買つてこよう。二つほど」

「うむ、良きに計らえ」

「俺はラジオ中継聞けるようにちよつと設定するわ」

近場で開かれる大会の名前をしつかりと伝えISの設定を少し弄つてラジオを聞けるようにする・・・そしてハツと冷静になった。

俺は一体何をやっているんだ？ 仮にも戦争中だよな？

そうだよ、戦争に勝つために資金集めするんだよ。そう、戦争とは人と情報と金だ。その内の二つでも手に入ればほぼ勝は確定する

のだ。

その内一つの情報は既に手に入れている、次は金だ！
……あれ？こんなんでいいんだっけ？

マスターが明日に向けて出張している間に俺は彼が誘拐した子供達を集めていた閉店した店？つばい所に仕掛けを施しまくった。と
いうか細工してる真つ最中。

各所に監視カメラを設置しどんなアングルからも見逃さないようにし。

電源スイッチ入れたら電撃が流れる様に配線。

その辺に大量に置かれている片付けられた机と椅子も微妙にバランスを崩し、少しの衝撃で倒れるようにする。

後は、踏んだら逆さに吊られるトラップとか、落とし穴とか……つてこれピタゴラじゃない、ただ普通のトラップじゃねえか！

「あー、もう作り直すしかねえか。もっとピタゴラしてやるよ！」

そう気合を入れた直後にこの店の近くに人が近づいて来たことを知らせるアラームが鳴った。

疑問に思っただアの窓を見れば外はもう真つ暗闇、時計を調べれば深夜。一体いつの間こんな時間に時間が経ったのか……

「よし、ステルスを使おう。マスターにもパスで……」

切られた

いいやいいやい、俺だけで楽しんでやるからいいよ！

ドキドキしながら入室を待っているとなんと凜嬢を連れた誘拐犯君が入ってきた……あ？なんで凜嬢連れてんだ殺すぞ。よし殺そう、今すぐ殺そうしよう。罠なんて知ったこっちゃねえ、野郎オブクラッシャー！

凜嬢の手を掴んで引つ張るその腕を、拡張領域から取り出したブレードでぶった斬る。

「は？え……は？」

「慈悲は無い」

「え？」

罪人と言えぱやっぱり斬首。こいつ負傷させてから少しでも生かすと勝手に救われるからな、そのまま地獄にでも行ってしまえ！

「あ、アサ、シン？」

「全く、夜遊びしたい気持ちも分かるが……まあいい、ソレは葵さんから叱つてもらうから」

「アサシン？」

「はいはいみんな大好きアサシンですよー？」

「こ、殺したの？」

「いいかい凜嬢。この世には死んだ方が世のためって人間もいるんだ。自分の欲望第一で動く人間なんて特にね」

「アサシンはなんとも思わないの！人を殺したのよ！」

「んーそうだな、残念だけどこれ、戦争なのよね」

「戦争……まさかマスターだったの！」

「文字通り、マスターだった、んだけどね……さて、葵さんに連絡を入れるから少し待ってなさい」

禅城の家に電話を入れ、「凜嬢は預かった。返してほしくば冬木にある公園に來い」と一度やってみたかった誘拐犯ごっこを楽しんだ。

道中で普通の虫をレベル1だとするとLv. 37くらいの大きめの羽虫が襲って来たけどぶった斬つといた……今年はあるな虫が湧くのか、なんか古代のデツカイトンボを思い出した。

「と言うわけです。もう寝ちゃってるんですけど、どうしましょうか」「車までお願いするわ……それにしても、あんな電話するからビックリしました」

「一度やってみたかったんですよ、誘拐犯ごっこ」

「……そういうのはご自分の家族でやってください」

「もういないんですよええ」

「あつ、すみません」

「いえ気にしないでください。死んだのは俺なんで」

「……何かおかしい気もするのだけれども」

「お気になさらずに。ああ、今の所脱落したのは一組だけです。後四組で終わりますよ」

「頑張つてね英雄さん」

「応援されたらそりゃ頑張るつきやないですねえ」

そして葵さんが乗ってきた車の助手席の背凭れを倒して凜嬢を寝かせてシートベルトをして、遠くへと行く車を見送りながら、

背後からスツゴイ視線を感じるんですが無視した方がいいんですかねえ？

ステルスフロートを飛ばし、公園で俺を見ていた奴の後をつける様にしておき、マスター抹殺と凜嬢の夜歩きの報告を時臣氏に伝えた俺はやることもないので魔道書動力炉を弄っていた。

改良に改善に改悪に重ね重ね試行錯誤し作った直後よりもマシにはなっている、マシには。

「かといって某魔を断つ剣みたいな感じで魔道書の精霊が出てこられても困るからいいんだけどアレ並の人工知能をロボに積まなきゃならない事になるしなあ、人工知能系は苦手なんだよなあ」

ん？いや、そつちじゃなく戦術機方面で行くか。コンボとキャンセル。先人の知恵を利用するのが後に続く者の利点だわな。二番じゃダメなんですか？

と言うことで動かすのに一番大事な中身の制作をISを使つてのモデリングを同時に行う。

空中モニターでモデルを動かして出来る限り挙動をスムーズにしていく。

「グラブレをデフォ装備にしようと思ったけどそんなデカイチェーンソーなかった」

やっぱり思い付きで行動するもんじゃないね、モデルでグラブレ振り回してるのは見てて楽しいけど・・・うーむ、どうしよう。

「ふむ、それはなんなのだ？」

「ああ王様。これは作ろうとしてるロボットの予想図だ」

「・・・予想図が動いているのだから？」

「作つて動かないロボットとかいやだろ？ちゃんと準備して、動かし

てみて、駄目な所が有ったら修正する。今はその修正する箇所を出来るだけ少なくしてる最中」

「出来てからでは遅いのか？」

「完成させたらすぐに動かしたくならない？」

「ふむ、確かに。バイクと言うモノを献上させたのだが、ガソリン？というモノが無くて動かせなかったのだ」

「燃料切れじゃねーか」

「ふむ、例えるならば魔力切れの様な事か」

「あとでガソリン入れてくるから鍵と置いてる場所教えて」

「庭だ。鍵・・・鍵とは何だ？」

「ああ、刺しっぱなしなのね、オーケー」

「いかんのか？」

「下手したら盗まれる」

「何？この私の所有物を奪おう等と・・・不屈きな」

「蔵にでも仕舞っとけば？」

「うむ、ガソリンを入れ終わったら呼ぶがよい。蔵へ入れるとしよう」

「バイクが宝具化するようです」

「聞くとところによると馬よりも早いのだろうか？」

「そして揺れも少ない！」

「ほほう、だがお高いのだろうか？」

「買うのが面倒なら献上させればいいじゃない！」

「ハツハツハ、これは一本取られたな！褒めて遣わす」

「・・・なんだこれ？」

「ギルガメッシュの言う馬を何度か買ったら新しい教会を二、三個建てれる額が当たったのだが」

「マジかよ億万長者だな」

「・・・お前が計画したものだぞ、アサシン」

「おけ、とりあえず業者に大量発注しよう」

「・・・どこで作業するつもりだ？」

「どこかあるのか？ないなら適当に地下室でも作っちゃまうぞ！」

「作れるのか」

「なんか、慣れた」

「土木作業に慣れる英雄とはどういうことなのだ」

「というか、第二の子供部屋は地下にあった。あったというかIS
あつたし重機要らなかったから自作した。」

「もうこいつ男なんじゃね？ってくらい男のロマンを理解していた
娘が欲しがったのでついノリで作ってしまった。結局息子の書齋化
したけど・・・俺ですら持つてない書齋を息子の方が早く手に入れた
事について少し凹んだのを覚えている。」

「その経験を活用すれば全長60メートルくらいのロボットなら収
納できる地下室をくれる技術力は持っている。」

「でもそれだけじゃないぞ！」

「地面からせり上がってガイナ立ちで登場！なんてことも出来るの
だ！」

「魔道書エンジンとガイナ立ちの原典と比べると60では低いが大
きい方だろう。」

「60メートルロボを収容出来るくらいの地下室は作れる」

「60メートルか・・・」

「え？足りない？じゃあもう少し」

「いい、止せ十分だ」

「そうか？じゃあ60で作るぞ」

「しかし、それだけ大きいのが作れるのか？」

「作れる作れないじゃない、技術者は作るのだ！」

「そ、そうか。では、金はここに置いておくぞ。足りなくなれば言っ
てくれ」

「・・・俺が現役の頃なんてこんなあつという間に稼げたんだ
がなあ」

「世界を救った後のアサシンの行動が気になってきてしまったではな
いか」

「その内夢で見るんじゃないか？」

「ん、あれ？60って確か、レオパルドン・・・よし、ソードを積も

う。

原作的問答前日ですよ

ピタゴラしようと思ったり、魔道書をエンジンにロボットを作ろうと計画したり、競馬で博打に出ることにしたり、誘拐犯が凜嬢を連れていたのでイラツとしてやってしまったり、誘拐犯ごっこしたり、ロボットの完成後のモーションを確かめたり、英雄王を褒め称えたり、マスターが大勝利して帰ってきたり、作るロボットを60メートル級にすることにした驚津です。

問題ない！六十メートルまでならツ！！

とりあえずひたすら鉄板やらケーブル類を下請工場に直接注文し、届くまでのんびりとさせてもらおう。

と言うことでいつものゲーセンにやってきたら征服王がスプラッターハウスしていた：もう意味が分からない。なんでスプラッターハウスなんだよおかしいだろ・・・

「おおアサシンよ！この様な代物もあるのだな！全くこの時代は素晴らしい娯楽に溢れておるな！」

「現世を楽しんでるようで何より。で、流石にずっとここで遊んでる訳じゃないだろ？」

「む？おおそうだとも！ここにおればお主が来るだろうと思っておったのだ！」

「ん？なんかあんの？」

「うむ、ちよつとした余興だが、此度の聖杯戦争。なんと王が三者も居るではないか！と言うことで王による聖杯を誰が手にするかの語り合いを行おうと思っていたのだが」

「だが？」

「王が三者も居ったら恐らく、互いに引かぬであろう。故に、判定する者を用意しておこうではないか！とな」

「で、それが俺なわけ？」

「うむ、我が知っており、会えるサーヴァントとなるとお主くらいだからな」

「王同士のいざこざに俺を巻き込むなよな、あの金ぴかには言った

のか?」

「うむ、先ほど鉄の馬に乗っておったぞ」

「バイクな。で、場所は?」

「セイバーの拠点である森の中の城だ!」

「ちゃんと連絡してるんだろうな」

「連絡が必要か?」

「必要だろ。確かに戦争するときには突然するが、訪問とか和平を結びに行く時には事前に知らせるだろう?」

「・・・全て部下に任せておったから分からぬ」

「いや、まあ王様としては正しいんだろうけどさ・・・で、いつよ」

「明日だ!」

「また突拍子の無い・・・連絡に関しては俺がやっておこう」

「うむ、手土産は任せろ! 旨い酒を用意しておこうではないか」

「じゃあ俺連絡してくるから、ゲームライフを楽しんで」

「応とも! この娯楽施設を征服したいほどだ!」

「迷惑になるから止めておきなさいねー」

「むう、我が聖杯戦争に勝ち抜いた暁には・・・ッ!」

「まあ、なんだ・・・頑張つて」

さて、その辺に捨ててあるママチャリでも探すか。

不法投棄されたママチャリが見当たらなかったからISで空飛んでやってきました森の中の城。

ISを解除して、扉の無い玄関の前で「セイバーちゃん!」とトトロでさつきを誘った女の子ごっこをしながら待っていると、武装したセイバーが走ってきた・・・なんでガチなん?」

「一体何用だアサシン!」

「明日、ここに征服王が来る。酒を飲みに」

「・・・は?」

「そして港にいた金色の奴も来る」

「・・・つまり、どういう事だ!」

「なんでも、王様同士で語り合い、誰が聖杯にふさわしいか決めようで

はないか！って企画らしい」

「らしい？貴様も良く分かっていないのか」

「さっき聞いたばかりで良く分かってないが、まあ征服王のやることだ、何も考えてないんだろ」

「やりたい事をやるだけではただの幼児ではないか」

「幼児が力持ったらああなるんやで」

「それは、恐ろしいな」

「と言うわけで、明日の多分夜だと思うんだけどライダーと金ぴかが来るから」

「・・・わざわざそれを知らせに来たのか？」

「迷惑がお前にかかるだろうからな。突然来て話し合おう！よりも事前に知っておいた方がいいだろう」

「一理あるが・・・我々は敵同士なのだぞ？」

「残念だが、俺も、俺のマスターも聖杯はどうでもいい、俺はただ戦いを楽しみたいだけ。聖杯を求めるんじゃないから敵じゃないさ」

「屁理屈だろう」

「あ、俺もなんか呼び出されたからこの時代のおかしを買ってこよう」

「ほう？それは是非食してみたいな」

「ん？食べたことはあるんじゃないのか？」

「日本の食事は恵まれている、とアイリが言っていたのだが・・・」

「じゃあ和食を用意してやろう。生魚は平気か？」

「まずそもそも生魚、というモノを食べた覚えがない」

「そこからか・・・じゃあ標準的な和食を用意しよう、適当に作るが良いか？」

「楽しみにしておこう！」

「じゃ、また明日の夜に」

「アサシンだけは歓迎しようではないか！」

食事一つで何故こんなに歓迎されるのだろうか。余程良くない待遇を受けているのだろうか・・・腕によりをかけ、全力で作ってあげようではないか。

なんやかんやの交際以来、千冬さんを唸らせ続けた婆ちゃん仕込の

家庭料理を味あわせてやろうではないか。

森の城からの帰り道、不意に少しだけ気になった。

港にあったコンテナ、派手にぶっ壊してたけどアレってどんな処理されるんだ？と。

璃正さんが嘆いてたのはよく覚えているが、あの後どうなったのかさっぱりわからん。

そう思ったのでいつも通り料理を作ったのでそれとなくその時間いてみた。

「若いのに実に見事な手並みでな、魔術に関しても魔術師の家系でもないのに実に理解も早くてね。なんでも市長が変わるたびに伝えられる話を聞いていたらしくてね」

「なんかスゲー嫌な内容な気がするんですけどその言い伝え」

「実際、大量破壊に大量殺戮が起る災害が六十年に一度発生する。と。説明を行えば『蓋を開ければ人災だったのか』と笑っておったので強く警告してはおいたので大丈夫だろう」

「今度菓子折りでも持って行ってあげよう」

「時臣氏が先にしておりましたよ」

「マジかよマスター代表が時臣氏かよ・・・じゃあ俺はサーヴァント代表として何かをくれてやろうではないか」

「急に英雄王の様な口ぶりになりましたな」

「マスターから聞いているかどうか分からないですが、今ちよつとキャスターから奪った・・・うん？奪った？宝具でロボット作ろうとしてるんですよね」

「・・・あれは本当の事だったのですか。そして、今話しているということとは」

「ちゃんと宝具は回収して、エンジンも何かしらの積んどきますよー！」「一体いつからこの世界は特撮になったのでしょうか」

「魔力なんてのがある時点でもうご察しですよ。蓋を開けたらとびつきりダーティーなダークファンタジー・・・ファンタジー？っていう実情がもう絶望的ですよねー」

「・・・日夜人が死んでいる、と言っても過言ではないですからね」

「しかし体を鍛えれば何でもできるって言うね」

「何事も極めてしまえば他の者は手出しできません」

「極めるかぁ・・・原子力はまずいよな」

「何やら冒流的な単語が聞こえたような気がしますが・・・私は何も聞いていません」

「ロボットに乗って八極拳って出来るんですかね？」

「分かりかねますが、大質量の物の力となれば、それは恐ろしい火力になるでしょうな」

「・・・そうか、あのロボットいらねーよ機動武闘戦士はまだ生まれてないのか。確か・・・四年後？」

「ほう？四年後が楽しみですか」

「アニメですよ？」

「武闘がメインなのですよね？」

「武闘とロボットがメインですけど・・・理論ぶっ飛んでますよ？」

「アサシン、貴方の八極拳はおかしい」

「師匠に酷いこと言われたでござる」

「他所で師匠等と呼ばないでくださいね、私は人外だと思われたくはないので」

「そんな！師匠酷いですよ！あんなに丁寧に俺に教えてくれたじゃないですか！」

「ハッハッハ、私が教えたのは八極拳の基礎であってあんなぶっ飛んだ八極拳ではありませんよ。一体いつの間に守破離されたので？」

「守破離ッ！そんなと一緒にされたくないんですか璃正さん！」

「基礎の段階からぶち破ってきましたからそもそも守してないですし、何も教えていないという事にはなりませんか？」

「なりません！なりませんぞ璃正師匠！俺に力が何たるかを教えてくれたのは師匠ではないですか！」

「力の流れについてだけです。貴方を弟子と呼べるほど強くはないのですよ」

「師匠の馬鹿！意気地なし！」

そう言っただけ俺はリビングから飛び出して……どこに行けばいいんだ？マジでノリで話してたからどうすりゃいいんだろうか……
とりあえずマスターん所行こうか。

「と言うわけだマスター。教えておいて全く違うって叱られるってどういふことなの？」

「それは仕方があるまい、私と父上の八極拳がアサシンが生前習得していた物と交わり全く別物と化しているからな」

「マスターまでひどくない!？」

「例えるならば、水と油とよく見る水色の固形燃料が完全に混ざり合った謎の液体と化している、様なものだ」

「表現が嫌過ぎるんですけど！固形燃料溶けてるんですけど！」

「すべて全くの異物であろう。そもそも、固形燃料が液体になった点についてだが、それだけおかしいということだ」

「なんで皆俺をいじめるのさ……」

「苛めてはいない。区別しているだけだ。決して混ぜてはならぬ領域でな」

「まあ生身の人間と英雄比べるのは間違えているけどさ、技術的にはマジで弟子なんだぜ？」

「私や父上よりも強い弟子などいて堪るか。そのような実力の者を弟子等と、口が裂けても呼べぬわ」

「あー、うん、そういうもんなの？」

「……弟子を持ったことは？」

「内弟子って言うの？家に住まわせる弟子ならいた。とは言っても勝手に色々学んでったけどな」

「その弟子は君よりも強かったか？」

「弱い。師匠ってのはそもそも弟子にとって越えられない壁だろ、何言ってるんだ」

「……私の方が何言ってるんだ、と言いたいのだがな」

「師とは越えられない壁であり、そして乗り越えた時に成長を感じ取れる相手。少なくとも俺は一人の師匠には勝ち逃げされた」

「・・・死んだのか？」

「いや失踪。それらしい話は聞くけど最後に別れたつきり」

実は師範と思わしき人物がアサシン教団をまとめ上げるのに一役買ったそうだ。デズモンド君が頑張ってる裏でアサシン教団員達を盛り上げるために必死に暗殺していたらしい。

まあ正直デズモンドパツパから聞いた話だから確認は取れてないが、まあ多分師範なんだろう。刀一本で警備会社に真正面から乗り込んで死傷者一名で済ませて戻ってきた、とか言う逸話からもう師範しか想像できなかつたりしたものだ。

「そういえばアサシン。ギルガメツシュが鎧を磨いていたのだが、何か知らないか？」

「・・・え？あの鎧の反射とかがって磨かれて出るものなのか？」

「知らぬが・・・して、何か知っているか？」

「あー、うん。明日の夜、ライダーが趣向を凝らしてセイバー陣営の拠点で話し合いをするらしい」

「ふむ？それはまた奇抜な」

「内容は『誰が聖杯にふさわしいかを王で語ろう』で、何故か俺も呼び出されてあら大変」

「ふむ、パスは繋いでおいてくれ」

「・・・パスと言えばマスター、この間なんでパス切ったんだよ」

「旨い麻婆豆腐の店を見つけてな、邪魔をされたくないからだ」

「あー、確かに食事中って邪魔されたくないし仕方ないね」

「今度あの味を再現して見せよう。アサシン、是非試食してくれ」

「俺で良ければ」

「では楽しみにしておいてくれ」

「分かった待ってるわ。じゃ、俺は明日の準備するから」

「何かあるのか？」

「俺の愛用包丁がなんか知らんが宝具にくっついてきてたっぽくてさ、研いどこうと」

「・・・何故宝具に包丁が」

「お前も三枚におろしてやろうかあ・・・」

「それではまるで英雄ではなく妖怪ではないか」

「妖怪、妖怪か。妖怪暗殺おじさん」

「それは・・・妖怪と呼べるのか？」

「なんか適当に思い浮かんだだけだし気にする必要は欠片もないぞ」

「それにどちらかと言うと妖怪以前に人外おじさんだ」

「それマスターが言う!？」

この人一步踏み込むだけで吹っ飛ぶ感じで迫ってきて胸骨粉碎してくるんだぜ？人外おじさんなのはどっちだよ・・・

「少なくとも、私は英雄ではないからな。まだ人間の範疇だ」

「スッゲー狡い言い訳し始めやがったぞこの男」

「私の勝ちだ、アサシン！」

「おのれ、おのれ言峰綺礼ツ！謀ったな！」

「何を人聞きの悪い事を言うか、勝手に自滅しただけであろう？」

「貴様、それでも人間か！」

「そうだ、私が人間だ！」

このマスター、いつから俺の茶番に乗るようになった？確か初めて会った時は堅物だったと思うんだが・・・おのれギルガメツシュ！貴様の仕業か!!

原作的問答直前ですよ

注文した商品が届くまでのんびりしようとしてたらゲーセンで征服王と遭遇したり、妙な企画を聞かされたり、パシッてみたり、セイバーに飯を食べさせるのが決まったり、璃正さんが酷かったり、マスターが妙なベクトルに成長してたのでお前の仕事かギルガメツシュ！ってなった鷲津です。

さーてやってまいりました聖杯問答当日。

朝っぱらから色々作ってISの拡張領域に収納。何が便利って時間が固定化されるというチート能力のおかげで作りたての料理がそのままデリバリー出来るって点だ。御飯炊き立ての電子ジャーをコンセント差さずに、保温もせずに持ち運んだ先でも出来立て御飯が食べれるとかなんだそりゃ、神か。つまり東さんは神やったんや！

でもさ、聖杯問答って原作ではアサシンが征服王の私兵に囲んで棒で叩かれてオワタんだよな。つまり、つまり・・・

俺、どうすれば生き残れるん？

ま、マスターが妙な事考えなきや上手く立ち回ればなんとかなる。んじゃないかなあ。

と言う事で、少し早め。早めと言っても十一時頃だ。

いつも通り地下を掘って土だの石だの素手やISで砕いた岩を拡張領域にぶちこみ、地面からせり上がる機構は作れたので既に設置してあるので、後は側面を綺麗にすれば60メートルの地下室の完成。と言ったところで業者のトラックがつかってしまったのだ・・・大量のトラックが、言峰教会に。

近所の人達にその道行く爺さん婆さんまで足を止めてなんだなんだ、とぎわざわし始めたが、璃正さんが色々と素敵スマイルを浮かべて説明していたので安心して任せて搬入を急ぐ。

と言うより、道路を開き、床をせり上がらせ、その上にトラックから降ろした諸々を乗せてボッシュュートする。この作業を五回ほど繰り返す。

子供達が「スツゲー！アニメみたい！」と言っていたので一人一人

にトップをねらえ全六話をダビングしたビデオテープをプレゼントしていく。たくさんアニメ見て大きくなあれ、ロマンを胸に抱いて大きく育て・・・何？女の子もいる？むしろ女の子が見ろ。

そんなわけで、届いた品々を点検し、どこにどう使うかで場所を分けておき、制作に取り掛かり、気が付いたらこの時間だった。やっぱり作業中って時間忘れちゃうよね！

「ちわー、アサシン夜食デリバリーサービスですがー」

「待っていたぞアサシン！・・・手ぶらではないか！よもやこの私を謀ったのではないな！」

「なんでそんなに飯食べるのに全力なんだよ・・・いや作った身としては嬉しいけどさ」

「して、夜食は何処だ」

「持ち運んでるから安心しろ。で、どこで食べるんだ？」

「中庭だ。征服王の案の語り合いもそこで行う予定なのでな」

「王様だらけの立食会とか参加したくねえな。用意したの家庭料理だぞ」

「だからこそ良いのではないか、その国の事が良く知れる」

「・・・俺アサシンだぞ？王様相手に毒物混入する、とか考えないのか？」

「アサシン、恐らくは貴公も武人なのだろう？ならばそんなことはしてこないだろう」

「もうホント王様って怖い。こっちの何もかもを見透かしてきて怖いからつい暗殺したくなっちゃう」

「暗殺とはつい、でするものなのか」

「普通はしないけど敵が邪魔するならつい殺すわな」

「恐らくだが・・・それは貴公だけだと思うぞ」

「あ？俺の知ってるアサシンってのはそんな連中だ。喧嘩売ってんのか飯食わさねえぞ」

「う、うむ、暗殺者に対する感覚が変わったぞ。だから食べさせてくれ」

「なんでそんな飯を・・・まあいいけどさ。中庭に案内してくれ」

「机に食器の用意は済んでいる。問おうアサシン、食品の貯蓄は十分か」

「いやそれ・・・いや、それでいいならいいんだけどもさ」

もう何この騎士王、十年後から出てきたとしか思えないんですけどそれは・・・てかスーツからドレスに早着替えするのはやめろ、何でマジなんだよコエエわ。

「来たぞ騎士王！連絡はついておる・・・何をしておるのだ？」

「見てわからぬか征服王。食事だ！」

「アカンねん、この子めつちや食うねん・・・追加で作るかこりゃ」

「この調理法が私の生きた時代になれば・・・ッ！」

「どんだけよこの子・・・」

「ふむ、我も貰おうではないか！」

「つて馬鹿ライダー！相手はアサシンだぞ！毒を盛られるかもしれないぞー！」

「戯け。アサシン故に暗躍もするであろう。だがこれだけは確かに言える、こやつはそのような真似はせん！」

「・・・なんで俺こんなに信頼されてるん？」

「それをボクに聞くのか！つてお前もお前でライダーに茶碗を差し出すな！」

「いや・・・ははあん、なんだ、お前も食べたいのかライダーのマスター」

「いらない！」

「まあそういうな小僧。お主も食せ。美味であるぞ」

「なっ！そのジャガイモは私が狙っていたもの、宣戦布告と受け取るぞー！」

「他にも肉があるであろう。肉を食わぬから体に肉がつかんのだ騎士王」

「貴様、言うに事欠いてそれを言うかッ！」

・・・なんでこいつ等肉じゃが取り合ってたんだ？他にもあるだろ、美味そうなの。と言うよりもだ、何よりもまず最優先するべきことが一つ。

「飯食つてる最中に喧嘩すんな馬鹿野郎！」

拡張領域から取り出した丸めた新聞紙の棒で頭をひっぱたく。俺で良かったな、千冬さんなら峰打ちだったぞ。

「う、うむ、アサシンのいう事ももつともであるな」

「す、すまなかった。い、今のが剣なら倒されていたところだ・・・」

「分かったならよし！さあ食べる！」

「それよりもまずはこの白米の追加だ！」

「我にも貰おうか！」

「はいはい、たくさん食べて大きくなあれ」

「ならばこれ以上大きくなるうではないか！」

「イヤミか貴様！」

ま、金ぴか王が来るまで平和な感じで行こうじゃないか。

「これは・・・なんだ」

「おい金ぴか王が呆れてるじゃねーか、やっぱ食事会やめときやよかったわー！」

「何ッ！それは正気で言っているのかアサシン！」

「ぶっちゃけそんな食に貪欲なお前だけだぞセイバー！」

「是非レシピを！」

「・・・渡しても作れるのか？」

「作り、そして食べてみせる」

「よろしい、ではその覚悟に免じてレシピを授けよう！」

娘が嫁入りした時に渡せる様に用意しておいたはいいが・・・婿取つた！とドヤ顔でいかにも草食系な男を連れてきて、彼が「主夫にさせられちゃいました」とか可哀想な事言っていたのでレシピを直伝してあげたのでご破算となった大学ノートを拡張領域から取り出し、何故か跪いているセイバーに渡す・・・なんだこれ。

「おい征服王。この様な茶番が続くようならば我は帰るぞ」

「うむ、おい騎士王！その辺りにして本題に入ろうではないか」

「・・・そうだな」

「いや、そのノートどこか置いて来いよセイバー。大事そうに抱えん

な」

「せ、セイバー？よかつたら私が持つておくわよ？」

「マダム、ありがとうございます。お願い致します」

「渡すタイミング後にしておいた方が良かったかな・・・すまんなセイバーのマスター」

「え？い、いいえ、大丈夫よアサシン。こちらこそセイバーが色々ごめんなさいね」

「いやまあ、面白いからいいんだけどね？」

「そ、そう？そう言つて貰えると助かるわ」

「で、ライダー。何するんだ？」

「王が三者も居るではないか。」

「フン。この我を差し置いて王を名乗る不逞な輩が何かを催すと聞いて来てみれば・・・道化よ、ここで何をしておる」

「セイバーに飯食わせた。後途中参加のライダーにも」

「当然、我にもあるのだろうな」

「残つてる肉じゃがでも食つてろ」

「王たるこの我に余り物を食せと・・・？」

「別に食わないなら食わないでいいんだぞ？」

「この我が吟味してやろう。ありがたく思えよ」

「こいつ偉そうに言つてるけど毎日食べてるんだよなあ。やれ胡椒が足りないだの塩が足りないだの。」

「今もよそつてやった白米と肉じゃが食つてる、金ぴかの鎧着て立つたまま・・・うん、何だこの光景。」

「なんだ、結局お主も食べるのではないか」

「語らうまでもなく、聖杯はこの我の物であるからな」

「む？そうなのか？」

「この世の全ての財は須らくこの我の蔵に納められる献上品なのだ」
「蔵に納められてない宝があるんですけどその点についてはどうお思

ふぶぶ。」

「知れた事よ。無いのならば手に入れるまでよ」

「聖杯を使つてか？」

「聖杯など宝を探す前段階にすぎん。狙うのは真なる宝、人類以前の宝だ！」

「む、その様なものがあるのか」

「そこな道化が持つておる」

「なーんで言っっちゃうかなー。これ狙う敵増えちゃうじゃないですかーやだー」

「何！アサシンはアーチャーと知り合いだったのか！」

「ちよつと遭遇する機会があつてね。俺の宝具が狙われちゃつて大変さ」

「して？どのような宝具なのだ？」

「征服王！それはマナー違反だぞ！」

「いやいいさ、いずれバレるだろうから早めに言っちまおう。聖杯の知識を持つてるサーヴァントは当然だろうが・・・ではマスター諸君、君たちは人類がどうやって知恵を身に着けたのかご存知かな？」

「知恵て・・・普通に進化したからだろ」

「ライダーのマスター、きつとこれはそういう意味の質問ではないと思ふの」

「あらその通りなのよ奥さん。全く、社会に出た事なんてないおぼっちゃんはダメねえ」

「気持ち悪いぞアサシン」

「ノリだよノリ。答えは一つ・・・」

「楽園の果实。エデンのリング・・・呼び方は如何様にも存在する」

「とつ、ちよつと王様？俺のキメ台詞取らないでくれないですかねえ」「知らん」

ツーンつてしてるけどアサシン知ってるよ。ほんとほんどや顔したいんだって。俺が他人のふりしてるから乗ってくれてるんだろう？まったく、ノリのいい王様だぜ。

「待つてアサシン！と言うことはまさか貴方・・・神話の英雄なの!？」

「そんな御大層な存在じゃないから安心して欲しい。色々あつてたまたまエデンの果实を手に入れただけのアサシンだよ」

「そんなアサシンがいてたまるかよー！」

「現実を受け入れる少年。目の前にいるんだぞ」

「なんでお前アサシンなんだよ!」

「おかしいだろ?自分でも分からん。そもそも英雄って自覚ないから余計にだ」

「自覚がない英霊・・・セイバー、それって有りえるの?」

「偉業を為した後に亡くなったか・・・単純にアサシンの感性が壊れて
いるかの二択ですね」

「ちなみにだアサシン、一体何をやったのか聞いてもいいか?」

「そうだな、少年にも分かりやすく言うと・・・ちよつと人類救つただ
けだ」

「・・・どうやら後者の様ね、セイバー」

「普通さ、英雄って王様とか偉業を為した連中だろ?神話とか、伝説に
残ってるような。俺、やった事を疑われて他人の手柄奪つたとか言わ
れてたんだぜ?そんな奴が英雄なんて・・・なあ?」

「だがやったのはお主なのだろう?」

「いやまあね。ノリと勢いで助けた人を助けようとしたらついでに
人類助けて・・・ついでに俺まで生き残つたつて言うね・・・もうね、
意味が分からねえよ」

「な、なにか分からないけれど大変だったのね、アサシン」

「もう超大変。英雄なんてなるもんじゃないよホント」

「え、ええ、そうなの?」

「ありや進んでなるもんじゃないよ。と言うか、なろうとしてなるの
はホント駄目。目的のついでくらいでいいんだよ。お姫様が好きな
騎士が、ある日攫われたお姫様を助けに行つて、連れ戻したら勇者つ
て扱いになった、みたいなノリでいいんだよ。世界救つてやるぞー
!つて奴はダメだねホント」

もう目標を失つてる状況だよ。なんか言つてたら一夏君思い出し
た。

子供達を助けるんだ!↓組織に潜入↓悪い組織の連中を発見!↓
断罪しようと俺が動く↓駄目だ殺すな!↓捕縛して政府に引き渡す
↓政府がそいつらを使つて悪用↓断罪しようと赴けば何故か一夏君

が立ちほだかる↓その間に逃げられる↓また子供達が犠牲になる。危うく無限ループにハマるところだったぜ、もうマジで何なのかとね・・・

全部が終わってから聞き出したが、一夏君は「我々のやってる事が気に食わないから荒らしに来た」って言う政府の話を鵜呑みにしたそうだ。丁度一夏君と疎遠になっていたのが終わった直後で色々気に食わなかったのは分かるが・・・うん、この話はもう終わらせておう。

「して、いつ始めるのだ？」

「いや、お主待ちだったのだが・・・来て早々飯を食い出しおったからのお」

「それに関しては、アサシンの作る食事が悪いと私から言っておこう」「セイバー、俺を売ったな！」

「何を言うアサシン。これが終わったらまた食事を作ってくれ！」

「我にもだアサシン！セイバーも、抜け駆けとは狡いではないか！」

「馬鹿め征服王！食事は早い者勝ちだ！」

「おのれ騎士王・・・誇りはどこへやった！」

「誇りならばあるさ。だがしかし！食事と戦場はまた別だ！」

もうマジでこの青セイバー十年後に連れてけよ・・・仕事しろよ第二魔法。

原作的聖杯問答ですよ

聖杯問答について俺の命の危機だったり、セイバーに渡す料理を作ったり、ロボの素材が届いたり、テンション上がってちよつと作業してたり、セイバーに飯を与えたり、ライダーが来て立食会化したり、王様が来て呆れられたりと王様に囲まれながらも割と楽しんでる鷺津です。

「うおっほん。ではこれより、聖杯問答を執り行おう！」

「今更威厳付けた所でああ・・・」

「言うなアサシン！気を取り直して行こうではないか！」

「気を取り直すのはライダー一人なんだよなあ」

「なんだそんなにネチネチと、そんなに我に恨みでもあるのかアサシン」

「そらお前、牛戦車に轢かれたら辛辣にもなるわ」

「それに関してはお主の注意不足と言うことだ。さて、では諸君！」

「すぐそばに止めてあつた牛戦車の荷台？から大きな樽を片手で抱えて降りてきて地面に降ろした。」

「金ぴかの鎧着てドヤ顔してるだけの王様よりこっちの王様の方が「ついでに行きたい！」って思うわなそりゃ。」

「変な機械いっぱい作ってドヤ顔してる俺や東さんよかガチガチの武闘派の千冬さんについて行くようなもんだ。誰だってそうだ、俺だってそつちを選んだ。」

「この街の酒屋で仕入れてきたものだ。語り合うには酒が必要だろうと思ってるな！」

「・・・征服王、何故先ほどの食事の時に出さなかったのだ」

「語り合いのために用意したものだからな。ちいとばかり早すぎると思っただのだ」

「ちなみに、その酒の種類は？」

「ブドウ酒だ」

「だったら出さなくても良かっただろうな、肉じゃががシチューモードキになってしまう・・・」

「シェフが勧めないのなら出さなくてよかったな」

「というかこの子の食欲が暴走してるだけだから気にしないでくれ」

「うむ？そうか。では本題に入ろうではないか！」

「しかし征服王、一体何を話し合うのだ？」

「うむ騎士王よ。聞けば聖杯とは相応しい者の前に現れる、と聞く。それを見つけるのがこの地での闘争なのだとしたら、なにも血を流す必要などない。語り合いにて互いの格を競い合う、それで十分なのではないかとな」

素晴らしい発想ではあるが、一つ重大な事をこの王様は見落としている。

人間とは互いに意見が食い違うから戦争をするのだということ。この侵略国家の王様は能天気か！

言っても良いけどスルーする方向で。理由？面白そうだから。

「そもそも征服王、話し合いでなんとかなれば戦争などしないだろう」
「確かに騎士王のいう事も最もだ。しかしそれは国を率いていた立場ゆえの事。こうして個人同士ならばどうだ？」

「余計な物を背負っていない分気楽、と言うわけだな」

余計な物が取っ払われたせいで暴走してる人が複数名、と言うか全員というね。

原作知識だとセイバー↓滅んだ国の濟世。ライダー↓この世で征服物語。アーチャー↓我の知らん宝を探しに行く。ランサー↓今の主に忠誠を。キャスター↓神様冒瀆したい。バーサーカー↓聖杯？そんなことより謝罪したい。アサシン↓ノリで。

まともに聖杯使おうとしてるのがセイバーだけっていう不具合。本来、マスターとサーヴァントの両方とも聖杯が欲しい、ってスタイルだろ？もう片方しか欲してない上にマスター連中もなんか違うって言うね・・・

ではマスター勢の原作を、

セイバー↓世界平和、ライダー↓名誉のため。アーチャー↓御三家として。ランサー↓自分の箔付けのため。キャスター↓マンネリ打開してたら。バーサーカー↓トツキーへの一方通行な恨み。アサシ

ン↓言われたから。

ガチで聖杯欲しい人が一人しかない件について。それもセイバーって言うね……

なんて色々考えている内に英雄王が空中に浮いている黄金に輝く渦から金ぴかの壺とコップを四つ取り出して投げ渡してきた。人が考え事してる最中にあぶねーな。

と、ライダーから回されてきた金ぴかの壺をコップに傾けて適当な量注ぎ、隣にいるセイバーに酌をしてやる。

俺はとりあえずこの酒を飲みながら三人の王の話し合いを眺めておこう。元々審査役って感じで呼ばれたんだ、問題は無いだろう。

とかぼんやりしてたら真っ白のお嬢さんに話しかけられた。

「えっと、アサシン、で良かったのよね？セイバーから聞いたわ。この間のキャスターの時は助かったって」

「いやなに、面倒な相手は囲んで大勢で叩くのが鉄板だからな。ここにいる連中は一人で無双出来る連中だから通用はしないだろうけど」
「アーチャーの事は良く分からないけど二人は前線で戦っていた王様ですものね」

「こりや正々堂々暗殺は無理かね」

「……暗殺って一体？」

「俺はアサシン。でもこそこそするだけが暗殺じゃないのさ少年」

「それってホントに暗殺かあ？」

白い美女さんと話していたら緑のカーデイガンを着ている少年まで混ざってきた。何この子ほっそ！

「いいかい少年、暗殺って言うのはね……『誰が殺したか分からないけどなんか死んでる』なんて状況よりも『目の前で偉い人が殺されて、下手人は逃げてった』って方が恐怖感を与えられるんだよ」

「そ、そんなもんなのか？」

「こう考えてみよう、身に覚えがないのにある日突然後ろから刺されるのと、ある日突然見知らぬ男が道の向かいから刃物を持ってお前に一直線に歩いてくるの、どっちが怖い」

「どっちも怖いわ！……でも直接的な怖さはやっぱり後者の方かな。」

明らかに異質だし」

「それをするのが俺だ。真昼間に敵陣に突っ込むのがな」

「・・・暗殺って本当になんだよ」

「目撃者が誰もいなければ暗殺さ」

「いやそれは・・・あってる、のか？」

「定義としては間違っつてはいないと思うけれど・・・うーん？」

「少なくとも俺はそういう暗殺スタイルってただだ。一番暗殺者って感じなのは元アサシンのマスターと・・・情報で見ただけだけど衛宮切嗣って人だな。マスターにしろマスターじゃないにしろ参加してらんだろ？なあ白いお姉さん」

「え？え、ええつと」

「数年前にアインツベルンに招かれたんだ。それで降派手な活動をしてないってことは御三家の一つに協力してるんだろ？」

俺の視線を真正面から真面目な表情で受け止める白い美女。

だがしかし！俺が本当に語りたのはこんなことではないので彼女が口を開く前にこちらから切り出す。

「時にアインツベルンと言えば魂関連の名門ってことで一つ聞きたい。無機物に魂を込める、というか無機物に魂を目覚めさせる方法なんて知らないか？」

「え？物に魂を・・・えつと、ごめんなさい、心当たりはないわ」

「そうか、じゃあゼロから色々試さなきゃならないか・・・」

「でもどうしてそんな事を聞くの？」

「そりやお前、アインツベルンはホモンクロス？ホムンクルス？の本場だろ？やっぱり魂つてのは有機物にしか宿らない物なのか？」

「えつと・・・貴方本当にアサシン？本当はキャスターだったりしない？」

「まあ生前は研究者と言うか発明家というか、俺自身なんでアサシンなのかも疑問には思ってる」

「まあ科学者！私達魔術師とは違う人だったのね！・・・でもなんで魔術に興味が？」

「魔力と科学を融合させたらどうなるのか？って」

「は、はあ!?!科学と魔術の融合!そんなことできるわけがないだろう!」

「出来ない、って言ってる奴は一生出来ないが、出来ると信じている奴はいずれ到達するだろう。科学で月に到達したのと同じように。魔術師が魔法を手に入れたように!偉い人は言いました!諦めたらそこで試合終了ですよ、と」

「いや、でも・・・なんで英雄ってのは皆ぶっ飛んでるんだよ!」

「人と違っちゃいけないのか?なら魔術師だって同じようなもんだ。総人口の何割が魔術を使えないと思ってるんだ少年」

「いやそれとこれとは話が違うだろ、大体魔力無いアサシンが英雄な時点で魔力有る無し関係ないと思うんだけど!」

「そうか?俺には魔力を使える奴のが有利に思えて仕方ないんだがな」

「正直、最近じゃ魔術は科学に超えられてきてる面もあると認めざるを得ないからなあ。この国の薬局でそう思うようになったよ」

「両方の良い所取りをすればより高みへと至れるんだよ少年!」

「なんでこのサーヴァントこんなにテンション高くなってるんだよ!」

「発明家、と言っていたしきつと何か琴線に触れたのよ」

「・・・そうだな、有機物に魂が宿るなら・・・イケルツ!」

「いや駄目だ!何を思いついたのか知らないけど駄目だ!」

「え、ええ、私もそう思うわ」

・・・そんなにダメかな、外側鉄の兵士、内側海鮮物。

こつちが凹んでるのに同調して王様同士の語り合いもなんか静まり返っている。なに?こつちの話聞こえちゃった?

「アサシン!お前は どう思う!」

「え?何?どつたのセイバー?」

「私の望みは間違えているのか!」

「え・・・あ、ああ、そういう事」

確かコイツの望みって過去に戻ってブリテン復興だったよな。

「正直俺は何かに望む時点で間違えてると思う」

「根本的な所から否定するのおお主」

「では何故聖杯戦争に参加したのだ！」

「なんか面白そうな奴に呼ばれたからだけど？」

「なっ！そんな、そんな理由で！」

「望みもないしな。まあ強いて言うなら人類の宇宙進出が捗りますように、って所かな」

「ほう？宇宙を侵略するのか！良いではないか、実に愉快そうだ！」

「ちなみに宇宙人はいなかったぞ」

「なにつ！おらんのか！それは残念だ」

「多分いてもいいもんじゃないぞ？」

「そうか？いるかもしれない、というロマンだけで楽しみなのだが」

「まあどつちにしろ安全確保の為にぶっ殺すんだけどな！」

「蹂躪して支配してくれようではないか！」

お互いのカップに酒を注ぎ直し、乾杯をして煽る。

「で、セイバー。お前の望みって何だっけ？」

「我が王国の、ブリテンの滅びの運命を変える」

「・・・その発想があるのか！良いなそれ！俺も自分の運命変えて貰おうかな」

別に何一つとして不満は無かったけど、やっぱりいきなりISに乗れるって分かって混乱したしな。

「ほう？お主程の男にも変えたい過去があるのか」

「当たり前だライダー！俺の人生後悔だらけだ！」

でもどこを改変する？って言われて一番なのは、子供達が大量に犠牲になってしまった所だ。もつと力があれば、もつと早ければ、もつと準備していたら・・・考えない日は無かったと言っても過言では決してない。

自分が救える範囲が限られてるとはいえそれを悔やまない訳では決してない。

「将来明るい子供達を何度救えなかった事か。確かに見たことも名前も聞いたこともない子供達だったがそれでも・・・そう思わずにはいられない。セイバーの言葉を聞いて何故その発想に至らなかったの

か・・・」

「子は宝だというのにその者共は・・・」

「その当時世界総人口七十億超えてたけどね。確か七十五億くらいはあったんじゃないかな」

「七十！すべての国を含めてか！」

「そうなるな。まあ勿論、当然の如く人類が皆仲良く手を繋ぐ、なんてことは知ってる限りじゃなかったけどな」

「一つの国をとってもそうなのだ、世界中ともなればそれは大層なことになるであろうな」

「足引っ張り合ってる場合じゃねーってのに。だからなセイバー。俺は別にお前が国の運命を変えるのも別にいいと思う。だけど一つだけ言っておきたいことがある」

「・・・なんだ」

「いくら過去をやり直そうとしたところで死んだ人間がそのまま生き返るわけじゃない。少しだけ違う世界に行くだけだ。今度こそ全てを救う、なんて意気込んで潰れないようにしておけよ。元々英雄なんて望んでなるもんじゃないからな」

「・・・心に留めておく」

さて、この話題ってことはそろそろマスターがなんかやらかして来たりしそうで身構えることにして・・・すっげえ不満そうな英雄王をどうしようかしら。

「暗殺者よ、貴様もその小娘と同じような事を考えたのか」

「あのさ、俺最後にも言ったよな。英雄なんて望んでなるもんじゃないってさ」

「あ、アサシン？お前はしないのか？」

「なんだその捨てられた犬の様な顔は。どうした？」

「アサシンも人を救いたいのではないのか！」

「勘違いするなセイバー！お前は人を救いたいんじゃない！自分を救いたいだけだ！」

「貴公、その言葉は聞き捨てならないぞ！」

「黙れセイバー！言いたくは無かったけど言わせてもらう、お前の国

が滅んだ原因大体お前じゃねえか！滅ぼした当人が救う！とかどう考えても自己満足だろうが！」

いーちやった言っちゃった。セイバーさんも無言で立ち上がって剣取り出してやる気満々激おこカリバーですわー……

「よろしい、ならば戦争だ」

「貴様から売ってきたのだろう、アサシン。真正面から私を打ち取れるなど努々思わぬことだな！」

「ハッ、暗殺者が真正面からのガチり合いが出来ないってそのふざけた幻想をぶち殺す！」

拡張領域からブレードを取り出し、一触即発。少しでも動いたら斬り合いの合図、そんな状況で――

風景が一瞬にして砂漠へと変貌した。